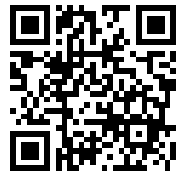

This is a reproduction of a library book that was digitized by Google as part of an ongoing effort to preserve the information in books and make it universally accessible.

Google™ books

<https://books.google.com>



佐賀縣方言語典一班

全

UNIVERSITY OF MICHIGAN



3 9015 03048 8251

PROPERTY OF

*University of
Michigan
Libraries*

1817



ARTES SCIENTIA VERITAS

此ノ本ハ利茶努尊ノ
集メタモノデス

*Shimizu, Kōchō
Saga-ken hōgen goten. ippan*



THIS BOOK IS
FROM THE RICHARDSON
LIBRARY

清水平一郎著

佐賀縣方言語典班全

佐賀縣教育會發行

PL

693

.S13

855

佐賀縣方言語典序

國語の統一が國民知識の進歩と思想の一致とに缺くべからざる要件なることは今敢へて多言を要せず而して國語の統一は必ず教育の力に待たざるべからず従つて國語の教授が國民教育の主要ある事業なること亦明なり然るに我國語の教授には特殊の困難あり言語と文字との關係文章語と口語との相異方言訛音の辨別等が既に普通教育の初歩に於いて兒童を苦まゝめ爲めに教育上幾多の障礙を來せることは夙に識者の認むる所なり近時國語教授の研究が教育社會の注意を惹き是等の困難を去り障礙を去らんとする方法を講ずる者多く實際の教授に漸次進歩の緒を現はせること寔に喜ぶべき所なり然れども妄に新奇を競ひ空論を弄び未熟の考案を取つて直に教育上に

實施せんとするが如きに至つては其の危険極めて大なりとす爲めに國民多數の子弟を戕賊し一國の言語文章を擾亂すること尠からせ國語制定の事業は一二の人の私案に依つて輕々と決すべきものにあらず必ずや慎重の研究を遂げたる後に於いてせざるべからず今や政府は國語調査の必要を認め特に委員を設けて之に従事せしめたり其の大成は假すに多くの年月を以てせざるべからず是の時に當り吾人教育者の務むべきことは徒に一時の議論に惑はず靜に退いて研究を積むにあり其の重要な事項を擧ぐれば二あり曰く現在の正しき國語を平易有効に教授する方法曰く將來國語の制定に關する資料の蒐集是あり

想ふに地方々言の調査の如きは右の研究を成就する手段として最も有益なるものなり然れども之を單に好事者一時の零碎

的探求に止めず集めて大成せんことは決して容易の業にあらず佐賀縣教育會曩に佐賀縣方言辞典を編纂して其の調査の一端を成し今又佐賀縣方言語典を發行して之を完うせるは地方語と普通語との關係を明にし教育上裨益する所頗る大あるべきことを信ず從來東北と九州とは一般に最も方言訛音の著きき地方と認めらるゝ所にして是等の地方が皆特に普通國語の普及に力を盡くせることは注意すべき現象なりとす而して佐賀縣教育會が其の事業として方言の調査を撰びたるは最も適切な著眼たることを失はず蓋し地方教育會は此の如き事業をなして始めて眞に有効の機關たることを得べければなり特に本書の著者は素養經驗俱に備へて自己出身地方の方言を研究せられたることなれば其の成績の顯著なること期して望むべきなり且つ本書は方言辞典の單に個々の言語を解説せるに反

して方言各品詞の性質用法規則等を説明したれば其の用一地方に限らず苟くも國語を研究せんとするものに參考の資となるものたることを疑はず茲に印刷の成れることを聞き其の舉を贅して一言を贈る

明治三十六年一月

岡田良平

上田文學博士書翰

拜啓愈御健勝に被爲渡慶賀の至に御座候兼て御約束申上置候
方言語典拜讀の事誠に〱遅延致し何とも申譯無之別封小包
郵便にて御返却申上候間御落掌被下度候

大体誠に結構に出來上り居り敬服の外無之候但し先般伊藤君
に拜顔の節申上候通り

第一、佐賀縣下ノ方言分布圖ヲ製スルコト

い、母音子音ノ異同ニヨリ

ろ、動詞ノ活用方ニヨリ

は、てにをはノ種類ニヨリ

に、其他特種ノ点

第二、舊幕時代ノ領地圖ヲ製シ之ヲ掲クルコト但シ舊藩主

ノ系統圖ヲ附スルモ妙ナラム

第三、舊幕時代ノ道中圖ヲ掲クルコト各大名ノ參勤交代ノ

道中ヲ示スコト

第四、文典ノ例ノ中ニ何レノ地方ニ特有ノ者ナルカ記シ分

クルコト即チ郡名村名若クハ全縣一般ニ通スルモノ

、區別ヲ立ツベギコト

第五、方言ヲ如何ナル形(語体)ニ引キ直スカヲ示スコト

右は何卒此際御調査の上御示レ被下度全圖中にての方言研究
 史上に一時期を畫レ候事と存候猶爲念愛知第二師範學校にて
 發表致レ候方言調査方針書手に入り候間御届申上候參考とモ

ならば幸甚に御座候先は右用事迄 早々不一

明治三十五年

九月二十二日

上田萬年

凡 例

- 一、この書は嚮に出版した辭書の缺を備はむ爲に編述したのである。
- 二、方言の假名遣は假名の發音通である。
- 三、拗音、促音は右下に小字を以て記し、引音(長音)は右肩に線を引いておく。たとへば

ひゃーあ (hya'a)

でゃーあわッか (dyawakka)

- 一、語法も地方により幾分か違つてゐる。因て、その行はるゝ版圍を示すとは、上田博士の御教示もあり、編者も必要を感じてゐる。おかし取調が一寸出來ないから、詳しいとはあとに譲り、たゞ舊幕時代の領地圖をそへて大体丈を示すとした。固より杜撰の誹は免れない

凡例

一、書中、西部とあるは、多久、武雄を中心として、その近傍より以西をさし、東部とあるは、佐賀、小城などを中心として、その近傍より東をさしたのである。荒島地方は両地方の間ともいふべく、田代はむしろ筑後、に似より、唐津は特別にて、その城下のごときは、江戸語そのままである。故にこの本を佐賀縣語典といへど、唐津はとりのけであるところ、こゝにとわつておく。

明治三十五年七月

著者　く　る　す

佐賀縣方言語典一斑

目次

第一編

音聲の部

自一至三十七頁

第二編

言語の部

自一至三八頁

以上



佐賀 鍋島直茂の後
 小城 鍋島勝茂の長子元茂の後
 蓮池 鍋島勝茂の三男直澄の後
 鹿島 鍋島勝茂の五男直朝の後
 多久 龍造寺隆信の弟長信の後
 久保田 龍造寺政家の次男安良の後
 須古 龍造寺周家の三男信周の後
 諫早 龍造寺鑑兼の長子家晴の後
 武雄 後藤則明の子政明の後（後龍造寺隆信の三男家信養子こふる）
 唐津 小笠原家の領地
 田代 對馬宗家の領地

立花家領

東部
 西部
 各家領土
 天領
 蓮池領
 對州領



子呼

湊

眞賀

打上

佐志

有浦

入野

唐津町

木切

大嶽

松浦川

崎瀬

土島

七山

鏡

里久

塚鬼

和相

鉾北

黒川

鳥牧

伊万里川

東山代

伊万里

二里

山

里万伊

天坪

大川内

南波多

浦松

木藏

天山

晴田

東多久

北多久

木若

内武

日朝

方北

久多

南多久

有明

黒雲山

古住

中通

町雄武

橋下

須古

田小

山口

佐留志

釜川西

釜川東

江錦

忍福

明有北

富福

西篠野

吉田

田塩

田町五

鹿島

北鹿野

南鹿野

木木八

枝古

能古見

多良島

七浦

多良

浦大

佐賀縣方言語典一斑

清水平一郎編纂

第一編 音聲の部

清音

ア イ ウ エ オ……ア行
カ キ ク ケ コ……カ行
サ シ ス セ ソ……サ行
タ チ ツ テ ト……タ行
ナ ニ ヌ ネ ノ……ナ行

ハ ヒ フ ヘ ホ……ハ行

マ ミ ム メ モ……マ行

ヤ シ ュ イ ヨ……ヤ行

ラ リ ル レ ロ……ラ行

ワ 井 于 エ チ……ワ行

ア イ ウ エ オ

列 列 列 列 列

是等五十音あるべき筈なれども、ヤ行の^シ、エと^リワ行の^ナとの三音は既に發音が出来ないものにて、従つて言語に用ひないものである。(音、方言に用ひないのみならず文語にも用ひない。)

濁音

ガギグゲゴ……ガ行

ザジズゼゾ……ザ行

ダヂヅデド……ダ行

バビブベボ……バ行

ア イ ウ エ オ

列 列 列 列 列

この二十音の内にて、ザ行のジ、ズとダ行のヂ、ヅとは九州以外にては發音し得る處は甚少い。關東の人はジ、ズが出来なくて、ヂ、ヅのみ發音し、字引をヂヒキ(地引)十字をヂーウヂと發音す。關西の人はヂ、ヅが出来なくて、ジズのみ發音し、メイヂ(明治)をメイジ(名字)ヂーウバコ(重箱)をジーウバコ(十箱)と發音す。例の文部省より出でた假名遣法に、ヂ、ヅはシ、ズとかくも差支ないとしてあるのも、これが爲である。

第一編 音聲の部 半濁音 鼻音 促音 拗音

半濁音

パピプペ ポ……バ行

鼻音(撥音)

ン

促音

ツ

拗音

キヤ キユ キヨ……キヤ行

チャ チュ チョ……チャ行

ヒャ ヒュ ヒョ……ヒャ行

シヤ シユ シヨ……シヤ行

ニヤ ニユ ニヨ……ニヤ行

ミヤ ミユ ミヨ……ミヤ行

リヤ リユ リヨ ……リヤ行

井ヤ 井ユ 井ヨ ……井ヤ行

ギヤ ギユ ギヨ ……ギヤ行

ジヤ ジユ ジヨ ……ジヤ行

ヂヤ チユ チヨ ……ヂヤ行

ビヤ ビユ ビヨ ……ビヤ行

ピヤ ピユ ピヨ ……ピヤ行

列ア 列ウ 列オ

列ア 列ウ 列オ

この音について、シ、ズが出来ない地方の人は、シャ、シユ、シヨが出来ない。ヂ、ヅの出来ない地方の人は、ヂヤ、ヂユ、ヂヨが出来ない。即、十両も重量も區別はないのである。併しこれ等は出来ないというて、むつかしき外国音さへ稽古する今日、之を放任するとは、果して教育家の本色であらうか。

クツ クヰ クヱ クヰ ……クツ行

グヰ グヰ グヱ グヰ ……グヰ行

ア 列
イ 列
エ 列
オ 列

この音なごも出来ないものがある。實は出来ないのではない。しないのである。

テヤ デヤ Tya dya

この音は文章語にはない。従つて其の綴り方もないから、特別に くらへたのである。

音聲の轉訛

他地方の人がこの地方の方言を解さうと思ふにも、またこの地方の者がその方言をためようと思ふにも、まづ音聲の轉訛したる有様を知ることが必要である。故に音聲の部にては、この轉訛の一斑を、實例によりて示さうと思ふ。

音聲の轉訛は母音(アイウエオ)が他の母音と合して發音さるゝ場合に多い様

である。今、二母音が合した時の發音あけてみよう。

ア₁ア₂ア₁ア₂ **Aa**

ア₁イ₂ヤ₁ア₂ **Ai**

ア₁ウ₂オ₁ウ₂ **Ao**

イ₁ア₂ヤ₁ア₂ **Ia**

イ₁イ₂イ₁ウ₂ **Ii**

イ₁ウ₂ユ₁ウ₂ **Iu**

ウ₁ア₂ア₁ア₂ **Ua**

ウ₁イ₂井₁イ₂ **Ui (W)**

ウ₁ウ₂ウ₁ウ₂ **Uu**

エ₁ア₂ヤ₁ア₂ **Ea**

エ₁イ₂エ₁エ₂ **Ei**

エ₁ウ₂ユ₁ウ₂ **Eu**

オ₁ア₂ア₁ア₂ **Oa**

オ₁イ₂エ₁エ₂ **Oi**

オ₁ウ₂ウ₁ウ₂ **Ou**

あらまじ、かやうな風である。これから實例によりて示してみよう。

第一、アイがヤの引音(ヤ)に訛るもの

ア 井 (藍)

アライ

ヤア

カ ヒ (貝)

カイ

キア

サ アイ (菜)

シャア

タ ヒ (鯛)

タイ

テア (ヤ) 或は チャー (Cha)

ナ アイ (内)

ニア

ハ ヒ (灰)

ハイ

ヒア

マ ヒ (舞)

マイ

ミア

ハヤキ (早)

ハヤアイ

ハヤア

アラキ (荒)

アラアイ

アリア

アハヒ (間)

アワアイ

ア井ヤアア (Awa)クレヤア (暮相)ヤアサツ (挨拶)キアアモン (買物)キアア (甲斐) ガナイシアアク (細工)クシアア (臭イ)テアアコ (大鼓)テアアギアア (大概)デアアコン (大根)ミアウデアア (名代)アンニアア (案内)オコニアア (行)ヒアア (蠅)ヒアアツタ (ハ入ツタ)ミアア (眉) イチミアア (一枚) クリアア (位)カキアアタ (乾イタ)

アキテ

アイテヤアテ

カキテ (書)

カアイテ

キヤアテ

サキテ (咲)

サアイテ

シヤアテ

タキテ (焼)

タアイテ

テヤアテ (Tyā-te)

ダキテ (抱)

ダアイテ

デヤアテ

ナキテ (泣)

ナアイテ

ニヤアテ

ハキテ (吐)

ハアイテ

ヒヤアテ

マキテ (巻)

マアイテ

ミヤアテ

ヤキテ (焼)

ヤアイテ

ヤアテ

ワキテ (沸)

ワアイテ

井ヤアテ (Wya-te)

タイテをチャアテ (Chā-te) と發音するものもあるが、下等社會に多い様

である。

シといふ音も、その父音がぬけてアと合する場合にはキの父音がぬけた場合と同様である。

カ^ア シ^イ テ(貸)

キ^ヤ アテ

サ^ア シ^イ テ(指)

シ^ヤ アテ

サ^ア ガ^ア シ^イ テ(探)

サ^ギ ヤ^ア アテ

ワタ^ア シ^イ テ(渡)

ワテ^ヤ アテ、ワチ^ヤ アテ

ハナ^ア シ^イ テ(話)

ハニ^ヤ アテ

マ^ア シ^イ テ(増)

ミ^ヤ アテ

カエシテ(返)

カ^ヤ アシテ
カ^ヤ アテ

クラァレ^イテ(暮)

クリ^ヤアテ

カハシテ(替)

カラァシ^イテカ井^ヤアテ

かくアイはヤの引音に發音さるゝのが一般であるが、筑後に接する地方にては之をエの引音に發音してゐる。左の如し。

カキテ

カイテ

ケ^一エテ(Ke-te)

タキテ

タイテ

テ^一エテ(Te-te)

カシテ

ケ^一エテ(Ke-te)

ハヒ(灰)

ハイ

ヘ^一エ(He)

カヒ(貝)

カイ

ケ^一エ(Ke)

第二、ウイが井^一の引音(We)又はイの引音(ie)になる。

ク ヒ (杵) クウイ ク^キイ (天^三) 又はキ^一イ (三)

ス ヒ (吸) スウイ シ^一イ

ツ ヒ ツウイ チ^一イ

ヌ ヒ (縫) ヌウイ ニ^一イ

ユ ヒ (結) ユウイ イ^一イ

ク^キ モン (食物) シ^一 モン (吸物) センシ^一イ (泉水)

オトチ^一イ (一昨日) カミイ^一イ (髮結)

ウキテ (浮) ウ^一イテ 井^一イテ (五^一五)

スキテ (隙) スウイテ シ^一イテ

ツキテ (就) ツウイテ チ^一イテ

ヌキテ(抜)

ヌウイテ

ニ₁イテ

ムキテ(向)

ムウイテ

ミ₁イテ

アルキテ(歩)

アルウイテ

アリ₁イテ

カクシテ

カクウイテ

カク_井イテ (Kakwite)

ウツウシイテ

ウチ₁イテ

ツプウシイテ

ツビ₁イテ

第三、エイがエの引音(㊦)となる

エ₁イ(榮)

エ₁エ

セキテ(塞)

セエイテ

セ₁エテ

ヘギテ(剝)

ヘエイテ

ヘ₁エデ

第四、オイがエの引音(音)又はエの引音(音)となる

オ ヒ (甥) オーイ エーエ 又は エーエ

イ コ ヒ (憩) イコオイ イケーエ

ト ヒ (樋) トオイ テーエ

ヨ ヒ (宵) ヨオイ エーエ

ナ カ イ ケ (中憩) オセー (遅イ) モレー (埓)

オ キ テ (置) オーイテ エーエテ

コ ギ テ (漕) コオイデ ケーエテ

ソ ギ テ (殺) ソオイデ セーエテ

ト キ テ (解) トオイテ テーエテ

ノキテ(退)

ノオイテ

子₁エテ

オシ₁テ(推)

エ₁エテ(we-te)

コ₁シ₁テ(漉)

ケ₁エテ

オト₁シ₁テ(落)

オエ₁エテ

ホ₁シ₁テ(于)

へ₁エテ

第五、エウがユの引音(we)となる

ケフ(今日) ケエウ

キ_ユウ(we)

テフ(蝶) テエウ

チ_ユウ

へウ(瓢)

ヒ_ユウ

レフ(獵)

レエウ

リ_ユウ

エフ(醉)

エーウ

ユーウ

ヒョーウタン(瓢箪)

ユーウテ(醉ウテ)

エウは普通にヨウウ(ヨ)となる。即、ケウウキョウウ(Kyo)テウキョウウ、ヘウウヒョウウ、レウウリョウウ、エウウリョウウ、ステウウ(捨テム)はステョウウ、ウケウウ(受ケム)ウケョウウ、などのやうである。然るに、この方言にては、皆、ユウウとなり、ステウウはスケユウウ(Schiu)、ウケウウはウキユウウ(ウキ)となる。

第六、オウはウの引音(三)となる。

オ フ(負)

オーウ

ウーウ

コ フ(乞)

コオウ

クーウ

ヒロフ(拾)

ヒロオウ

ヒルーウ

ヨ ク

ヨ オ ウ

ユ ー ウ

借錢 ウーウタ (負ウタ)

物チクーウタ (乞ウタ)

物チヒルーウ (拾フ)

ユーウキタ (能ウキタ)

クーウヤ (紺屋)

クーウヂ (小路)

オーウは普通にオ、オと發音するのである。

オホ(大、多)は普通にオ、オと發音するのをこゝにてはウーウと同様にウーウと發音す

オーホ(大、多、)

オーウ

ウーウ

ウーウカワ (大川) ウーウアメ (大雨) ウーウニンズ (大人數)

引音につきては、これ等の外、普通違ふ處は少いやうである。但、アア、

イ、ア、ウ、エ、オ、などか如何なる場合に用ひられて如何に發音さるゝかは、あとに譲りて、これから一種違つた轉訛につきて述べてみよう。

第七、リが他音の下にある時は大概イとなる。

アリ(蟻)	アイ	イリ(入)	イイ
ウリ(瓜)	ウイ	エリ(襟)	エイ(罍)
オリ(織)	オイ	カリ(狩)	カイ
キリ(桐)	キイ	クリ(栗)	クイ
ケリ		コリ(懲)	コイ
サリ		シリ(尻)	シイ

スリ(搦摸)	スイ	セリ(芹)	セ「エ
ソリ(荊)	ソイ	タリ	タイ
チリ(塵)	チイ	ツリ(釣)	ツイ
テリ(照)	テ「エ	トリ(鳥)	トイ
ナリ(成)	ナイ	ニリ	ニイ
ヌリ(塗)	ヌイ	ネリ	ネ「エ
ノリ(糊)	ノイ	ハリ(針)	ハイ
ヒリ	ヒイ	フリ(降)	フイ
ヘリ(蝶)	ヘ「エ	ホリ(堀)	ホイ
マリ(毬)	マイ	ミリ	ミイ

ムリ(無理) ムイ メリ メイ

モリ(森) モイ ヤリ(鎗) ヤイ

ユリ(百合) ユイ ヨリ(寄) ヨイ

ラリ ライ リリ リイ

ルリ ルイ レリ レイ

ロリ ロイ

第八、レがイに訛るとがある。

コレ(是) コイ ソレ(其) ソイ

アレ(彼) アイ ドレ ドイ

ダレ(誰) ダイ

第一編 音聲の部 音聲の轉訛

クレロ (クレヨ) クイロ

キタレ (來) キタイ

ゴザレ (御座) ゴザイ

ナサレ (被成) ナサイ

レがイ訛るのは特に習慣がありて、之を一般に及すとは出来ない、
 第九、リをイに訛る反動として、イをりに訛るとがある。

ニホヒ (香) ニチイ ニチリ (niwori)

シヤウウユ (醤油) シヤウウイ シヤウウリ (Shori)

コヒ (鯉) コイ コリ

タヒ (鯛) タイ タリ

クワイ(會)

クワリ(Kwori)

マカナヒ(賄)

マカナイ

マカナリ

これも一般に及すとは出来ない。クワイ(會)などは單に村會、青年會などいふ場合にはソクワリ、セイチンクワリとは滅多にいはない、村會に、青年會に、などいふ場合にはソクワリイ(ソククワイニ)セイチンクワリイ(セイチンクワイニ)、など普通にいふ様である。

第十、ユをイに訛るとがある

アユ(鮭)

アイ

カユ(粥)

カイ

サユ(湯)

サイ

シャユウ(醤油)

シャウイ

フユ(冬)

ファイ

ツユ(露)

チーイ(豆)

第十一、ヌをンに訛るとがある。

イヌ(犬) イン ウヌ ウン

キヌ(絹) キン

第十二、クワをクッ(Kwo)又はカと訛るとがある。

クハ(鋏、桑) クワ クッ カ

クワイ(慈姑) クッ カイ

クハン(食ハヌ) クワン クワン カン

佐賀市及其近傍のみはクッといふべきを皆カと發音しカイ(會)カン(觀)と

いふからクワ||クッ||カとなり「カノ木」(桑の木)などいふ。

第十三、ルを引音に訛るとがある。これは西部地方に限る様である。

マル(丸) マーア サル(猿) サーア

タル(樽) ターア ホタル(螢) ホターア

ハル(春) ハーア

第十四、ラ行の音をダ行に訛るとがある。併これ等は無教育の者や、小供に多し。

ランプ ダンプ

リップ(立派) ギッパ

レンコン(蓮根) デンコン

ロク(六) ドク

第十五、ダ行ラ行に訛るともある。こたも無教育の者に限るやうである。

デンパーウ(電報) レンパーウ
ドク(毒) ロク

第十六、ヒ行をフ行に、フをヒに訛るとがある。

カゼヒク(風引) カゼフク

ヒサシ¹ウ(久) フサシ¹ウ

ヒッパル(引張) フッパル

フロシキ(風呂敷) ヒロシキ

カゼガフク(風が吹) カゼガヒク

これ等の外、なほあるたらうが、今はこれ丈にておくとしよう。

事物は一般に、世が進歩するに従つて、益、ふつて愈複雑になるものである。

これと同時に一方には又段々簡便になるとは自然の趨勢ではあるまいか。言語のこときときもこの理に逆らうとは蓋、出来ないものである。昔はフ# (A) (E)であつたのが何時頃からか井の父音はぬけてしまつてアイ (A) と發音するやうになつた。それが又わが方言にてはヤ、ア (ふ) と發音するやうになつたのは、惡くいへば、ずるけたのであるけれども、よくいへば自然の趨勢に従つて、進歩したものだといつてもよろしい。然し世の中は歴史もあり、習慣もありて、なり立つてゐるから、只理論づくめて推し通すとは出来ないといふとはあくまで承知せねばならないのである。

第二編 言語の部

言語に七ツの種類がある。名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、接續詞、感動詞、これ等を七品詞といふ。別にこれ等の七品詞を補助する辭がある。之を助辭といふ。

名詞

名詞は名を表す言葉である。トイ（鳥）イサ（魚）などよふ言葉は名詞である。

代名詞

代名詞は名詞に代へて、用ふる言葉である。代名詞には人の名に代へて用ふるものと、事物、場合、方角などの名にかへて用ふるものがある。

第一、人の名に代へて用ふるもの

自身の名に代へて

オ イ(オレ、己) ワタクシ(私)

おのれが話をする人の名に代へて

ワ イ(ワレ) オ ト オマイ(オマへ)

ソナタ アナタ キコウ(貴公)

自分でもなく、自分が話をする人でもなく、其の外の人の名に代へて用ふるもの

ア イ(アレ) アンヒト(アノヒト) アノオカタ

誰とも分らない人の名に代へて

ダ イ (誰) ドントヒ (ドノヒト) ドナタ

もし一人以上である場合は ドン タナ ガタ などを附くる。

オドン (オレドモ、己等) オイのイを省いていふ。

ワタクレドン (私ドモ)

ワイタチ (ワレタチ、汝等)

オツタチ (オトタチ)

オマイタチ (オマヘタチ)

ソナタガタ

アナタガタ

アイドン (アレドモ)

アンヒッタチ(アノヒトタチ)

アノオカタガタ

ダイドン(誰ドモ)

ドンヒッタチ(ドノヒトタチ)

ドナタガタ

第二、事物、場所、方角などに用ふるもの。

自分に近ぎのに用ふるもの

コ イ(コレ)

ココ

コッチ(コナラ)

コンタ(コナタ)

自分が話をする人のあたりののに用ふるもの

ソ イ(ソレ)

ソコ

ソッチ(ソナラ)

ソンタ(ソナタ)

自分にも、自分が話をする人にも、遠ざかりてゐるのに用ふるもの

ア イ(アレ) アッコ(アシユ、アツユ) アッチ(アケラ)

アンタ(アナタ)

それらが分からないのに用ふるもの

ド イ(ドレ) ドコ ドッチ(ドケラ) ドンタ(ドナタ)

ナ イ(何) ナン(何) イクラ

數をいふ時には普通にイクツといふけれども、イクツといふ場合にも、イクラといふとが多いやうである。

代名詞はさつとこんあものである。これらの中にて、普通に通じないものをおいて、通ずるものゝみをあけてみよう。

自分のに代へて

ワタシ は目上にも、目下にも通じて用ふるやうである。

ワタクシ は同等以上に用ひらるゝやうである。手紙などには種々なむつかしい語を用ふるやうであるがそれよりも、「私」などを用ふる方が、平易にして角立もせず、又使ひそこないもないやうである。

自分が話をする人のに代へて

オマエ (オマへ) はこの地方にては同等より、その以上に對しても用ふるが、他地方にては目下のものに對してのみ用ふるから、注意しないと思はざるに人の感情をそこなふとがある。

アナア は同等以上に用ひらるゝ。

話仲間以外の人のに代へて

ア レ は敬意を表はさない場合に用ひらる。

アノヒト は稍敬意を表す場合に用ひらるゝ。

アノオカタ は敬意を表す場合に用ひらるゝ。

疑問の時

ダ レ は敬意を表はさない場合に用ひらるゝ。

ドノヒト は稍敬意を表す場合に用ひらるゝ。

ドナタ は敬意を表す場合に用ひらるゝ。

事物などに用ひらるゝものは大概通じないものはないが、但、コイ ソイ
などの イ はよく注意して レ といはねばわからない。又 コツテ ソ

ツテ などをも コナラ ソナラ どのやうに アッコ をも アシユ ア

ソコ などのいはねばわかりにくい又。ナイ、ナン あどをも ナニ といはねばならない。大阪近邊中國あたりにては ナンボ といつて イクラ といはないや、うであるが、東京の方にては イクラ といつて ナンボ といはないや、うである。これ等はごちらを使つてもよからうと思はるゝ。

形容詞

形容詞は性質とか状態とかを表すとばである。シロカ、リツパカ、なごは形容詞である

方言の形容詞で普通に通じないのをあけてみよう

ヌツカ (アタタカイ、アツイ) (あつし、熱、あたゝかなり)

アツタカ (アツイ) 食物飲物なごに用ひらるゝ

ヒヤカ (サムイ) さむし、寒)

コマカ (チイサイ、ホソイ) (ちいさし、小、ほそし、細)

ホスカ (チイサイ、ホソイ) (ちいさし、小、ほそし、細)

フトカ (オホキイ) (おほいなり、大)

トンチカ (トーホイ) (とほし、遠)

トーウチカ (トーホイ) (とほし、遠)

トーウゼンナカ (サミシイ) (さびし、寂)

ツクシカ (ウツクシイ) (うつくし、美)

タツカ (タカイ) (たかし、高)

キンナカ (キナイ) (きなり、黄)

ヒダーアカ (ヒモシイ)

ヒツカ (ヒクイ) ひくと、低)

ヨクカ (Yoku) 又ハ (Yoku) (ヨクダ) (ケチダ) (慾なり)

ヨンニユーウカ (オーホイ) (おほし、多)

方言の形容詞にはいつもその語尾にカが添うている。但副詞風に使はるゝ場にはウがそゝうて引音となる。形容詞の語尾のカはカルのルを省いたものである。丁度奇麗ナルのルを省いて奇麗ナといふのと同じ理であらう。漢語を形容詞として用ふる場合にも、カを添へて、立派カ 奇麗カ 鈍カ などいふ。然し 立派ナ 奇麗ナ など全くいはずではない。

動詞

動詞ははたらきを表す言葉である。間には存在を表すものもある。キバル

(働) サルク(アルク) あごははたらきを表す、動詞にて、アル(在) オル

(居)などは存在を表す動詞である。

左の方言の動詞をあけてみよう。

アユル (オナル、落) (おつ、落)

アヤス (おどす、落)

イゴク (うごく、動)

イゴカス (うごかす、動)

ウシツル (スツル) (すつ、捨)

オオナク (アナムク) (あふぐ、仰)

クルビク

(うつむく、附)

クラスル

(うつ、打)

動詞の種類

動詞には語尾といふものがありて、其の形が種々ある。

今その形によりて、之を類別してみよう。

第一類 語尾に ア、イ、ウ、エ、の列の音を備へてゐるもの。

行	語	根	語
列	尾	列	尾
		ア	列
		イ	列
		ウ	列
		エ	列

カ行	咲	カ	キ	ク	ケ
----	---	---	---	---	---

ガ行	殺	ガ	ギ	グ	ゲ
----	---	---	---	---	---

第二編 言辭の部 動詞の種類

第二類 語尾にウエの列の音を備へてゐるもの

サ行 移シツ サ シ ス セ

タ行 立タ タ チ ツ テ

ナ行 死シ ナ ニ ヌ ネ

バ行 死ト バ ビ ブ ベ

ヤ行 讀マ マ ミ ム メ

ラ行 降フ ラ リ ル(ウ) レ

ワ行 買イ ワ 井(イ) ウ エ(エ)

行 語根 / 語尾
列ウ 列エ

カ行 受ウ クツ ケ

第二編 言語の部 動詞の種類

ラ行	ヤ行	マ行	バ行	ナ行	ダ行	タ行	サ行	ガ行
晴 <small>ハ</small>	肥 <small>コ</small>	染 <small>ツ</small>	燻 <small>フス</small>	兼 <small>カ</small>	出 <small>イ</small>	立 <small>タ</small>	馳 <small>ハ</small>	舉 <small>ア</small>
ル <small>ツ</small>	ユ <small>ツ</small>	ム <small>ツ</small>	ブ <small>ツ</small>	ヌ <small>ツ</small>	ヅ <small>ツ</small>	ツ <small>ツ</small>	ス <small>ツ</small>	グ <small>ツ</small>
レ	エ	メ	ベ	ネ	デ	テ	セ	ゲ

第三類 語尾はイ列音のみを備へてゐるもの

行ニ語尾
語尾
列イ

カ行 起^キ キ^ッ

ガ行 過^ス ギ^ッ

タ行 落^ト チ^ッ

ダ行 振^チ チ^ッ

ナ行 似^ニ ニ^ッ

ハ行 干^ヒ ヒ^ッ

マ行 見^ミ ミ^ッ

ラ行 下^リ リ^ッ

第四類 一種違つた語尾を備へてゐるもの

行語根 / 語尾

カ行	來	キ	ク	コ
サ行	爲	シ	ス	セ

方言の動詞にて第一類のみは文語とあまり違ふとはない。

只十行の「死ぬ」といふ動詞が文語にては

死
 な
 に
 ぬ
 ぬる
 ぬれ

といふ語をもつのと、ワ行の動詞が皆、ハ行なるとの違のみである。

第二類の動詞は文語にては孰もウ列音にルレを添へて

受 け く くる くれ

馳 せ す する すれ

などの様にいふけれども方言のには、只、ウ列音に促音ッが添はる計りである
第三類の動詞は文語にては二ツの種類に別れてゐる。

即「起く」落つ。などはイ列音とウ列音がありて、其のウ列音には ル、レ
が添ふのである

落 ち つ つる つれ

起 き く くる くれ

などの様である。又「見る」^ミ「似る」などはイ列音にルレが添はりてゐる。

見 み みる みれ

似 　　に 　　にる 　　にれ

第四類の動詞も矢張ウ列にルレが添はりてゐる。

來 　　こ 　　き 　　く 　　くる 　　くれ

爲 　　せ 　　し 　　す 　　する 　　すれ

これ等の外に文語にてはナ行とラ行とがあるが方言にては皆、第一類に入りてをる。

副 詞

副詞は動詞、形容詞、などに副うて其の意味を定むることはである。ナカット
 ヨンニールウなどは即、副詞である。

左に方言の副詞をあけてみよう

チカツト (スコシ) (わづか)

チヒツト (スコシ)

ヨンニウ (タクサン) (おほく)

コギヤン (ユンナニ) (ユノトーホリ) (かく)

ソギヤン (ソンナニ) (ソノトーホリ)

アギヤン (アンナニ) (アノトーホリ)

ドギヤン (ドンナニ) (ドノトーホリ)

イツチョン (スコシモ) (サツバリ)

ネツカラ (ヒトツモ) (イナドモ)

メツテャア (Mej jā) (メッタニ) 「メツテャア」 (Me t chā) 25
 ふものもある」

タシキヤア (タシカ)

ソギャン アギャン などいふ語は

ソギャン 事 (ソンナ)

アギャン 者 (アンナ)

など形容詞にも用ひらるゝ。

これ等の外、返事に用ひらるゝことばをあけてみよう。

ナイ (ハイ、ヘイ)

ウーウ (エ)

オ₁オ (o)ア₁イエ₁エ (e)

ナイは同等以上に用ひられ、アイ ウーウ オ₁オ などとは同等より以下に、エ₁エ は尤も卑しいものに用ひらるゝ。

この他チイ (Nei) といふとばもあるがこれは極く下等の者より極上等の人に對していふやうである。即ち、多くは穢多などが用ひてゐた様である。

インニ₊ インニ は普通に イ₁イ₁エ といふ語と同じ意にて、文語の イナ (否) である。インニ₊ は目下に、インニ₋ は目上に用ふる。

接 續 詞

接續詞はことばごか話とかをつゞくるものである。アイド_ン ツイケン な

どは方言の接續詞である。左に例をあけてみよう。

ソイケン (ダカラ) (ソレダカラ)

アイトン (シカシ)

ソイバツテン (ソレダケレドモ)

アイバツテン (サーウデハアルガ)

バツテン (ケレドモ) (ダケレドモ)

ソイギーイ (ソレナラ)

ソイギーイニヤーアワ (ソレナラバ) サヤーウデアアルナラ

感動詞

感動詞は感動した時に發するとはである。ホ、オホ、オ、アリヤ、などは感動

詞である。

助辭

助辭は品詞の意味を助くるものである。

人^ン | キ^タ

サ^クラ^ア | サ^カン

右の^ン、^タ、^ア、^ン、などは助辭である。が助辭のとはあとに譲るとはしよ、
ろ。

形容詞の用法

一、終止法 意味のとまる場合

雲^ハ | シ^ロカ[。]

(白^イ)

(白^じ。白^{かり})

此は リッパカ (立派ダ) (立派なり)

孰も キレイカ (奇麗ダ) (奇麗なり)

「立派ダ」「奇麗ダ」などは「立派デアル」「奇麗デアル」といふ方が上品にあるやうである。

二、連体法 意味が名詞なごにかゝる場合

シロカ 花 (白イ) 白さ

リッパカ 物 (立派ナ) 立派なる

キレイカ 器 (奇麗ナ) 奇麗なる

漢語を形容詞とする場合、即、立派とか奇麗とかいふ語を形容詞として使ふ時にもカを添へて國語的にする事が普通であるが、云ひなれぬ語は矢張ナを添へていふやうである。

三、前提法假定 他の事柄の前提となる場合、而して其の意の假定なるもの

シロカ・ギイ (白イナラ) (白くば)

チカカ・ナイバ (近イナラ) (近くば)

立派カ・ギイ (立派ナラ) (立派なら)

奇麗カ・ナイバ (奇麗ナラ) (奇麗なら)

「ギイ」「ナイバ」執をも添へらるゝのみならず「ギイニャアワ」(INGWA)を「ギイ」の代にをふるともあるこれは動詞の假定を表す場合も同様である。

四、前提法確定 他の事柄の前提となる場合、而して其の意の確定したるもの

の

シロカケン (白イカラ) (白ければ)

チカカケン (近イカラ) (近ければ)

立派カケン (立派ダカラ) (立派なれば)

奇麗カケン (奇麗ダカラ) (奇麗なれば)

五、副詞法 動詞に副はる場合

ハヤ、ウ (早、ウ) (早く)

リッ、パー、ウ (立派ニ) (立派に)

副詞法は普通語とあまり違ふ所はない、只漢語を國語風にリッ、パー、ウをいふとあれど、これ等もごく小數の詞に限られてゐる様である。

六、接續法 他の事柄に續く場合

シロ、ウシテ (白、ウシテ) (白くて、白くシテ)

リップパーウシテ (立派ニシテ) (立派にして)

キレイニシテ (奇麗ニシテ) (奇麗にして)

接續法も普通語とかはりはない。

七、熟語法 他の語と合ひて一語となる場合

シロクロカ (白黒イ) (白黒と)

リップスギル (立派過ギル) (立派過ぐ)

これも普通の語とかはりはない。

八、疑問法 疑問の場合

シロカカ (白イカ) (白きか)

リップカカ (立派ダカ) (立派なるか)

キレイカカ。

(奇麗ダカ)

(奇麗なるか)

第一類動詞の法

一、終止法 意味の止まる場合、ウ列音をもつて止むると文語も同様である。

花が サク。

(咲く)

人が タツ。

(立つ)

猫が シヌ。

(死ぬ)

鳥が トブ。

(飛ぶ)

雨が ヤム。

(止む)

雨が フッ。フーウ (降る)

人に アウ。 (逢ふ)

右の中、ラ行のみが一種特別である。此の種の動詞に限りラ行のルが其のまゝに發音されないで促音、又は引音に發音さるゝ、即、東部地方は促音を用ひ、西部地方は引音を用ふる様である。

雨が フッ。フーウ (降ル) (降る)

池を ホッ。ホーウ (堀ル) (堀る)

魚を ツッ。ツーウ (釣ル) (釣る)

枝を オッ。オーウ (折ル) (折る)

二、連体法名詞をどこにかゝる場合、ウ列音を用ふると矢張、文語に同じい

サク 時

タツ 時

シヌ 時

(死ぬる)

トブ 時

ヨム 時

フヅ、フーウ 時

(降る)

アウ 時

(逢ふ)

右の中、ナ行の「シヌ」は文語にてはこの類の動詞でない。又「アウ」はハ行である。ラ行が特に促音（東部地方）引音（西部地方）に變はると終止法に同じ。

雨が フッ。フーウ 時
 池を ホッ。ホーウ 時
 魚を ツッ。ツーウ 時
 枝を オッ。オーウ 時

三、前提法假定 他の事柄の前提となる場合、而して其の意の假定なるもの。
 終止法に「ギイ」又は「ナイバ」を添ふ。

花の サクギイ (咲クナラ) (咲かば)
 人が タツギイ (立ツナラ) (立たば)
 猫が シヌギイ (シヌナラ) (死なば)
 鳥が トブギイ (トブナラ) (飛ばゞ)

本を ヨムギイ (ヨムナラ) (讀まば)

雨の フツギイ、フーウギイ (フルナラ) (降らば)

人に アウギイ (アウナラ) (逢はゞ)

ギイの代にナイバをもそふる。

サクナイバ タツナイバ トブナイバ

ヨムナイバ フツナイバ フーナイバ

ラ行が促音(東部)又は引音(西部)であるとはこの法にても同じい。

四、前提法確定 他の事柄の前提となる場合而して其の意の確定したるもの
終止法に「ケン」を添ふ。

花が サクケン (サクナラ) (咲けば)

人が タツケン (タツカラ) (立てば)

猫が シヌケン (シヌカラ) (死ぬれば)

鳥が トブケン (トブカラ) (飛べば)

本を ヨムケン (ヨムカラ) (讀めば)

雨が フツケン。フウケン (フルカラ) (降れば)

人に アウケン (アウカラ) (逢へば)

五、熟語法 他の詞と合うて一語となる場合

カキ・ハジムル ウチ・コロス

など大概文語に同じい。但、場合により促まるとがある。

カッ・カケタ (カキ、カケテ)

ヲ行はリがイはかはる

ツイソコナウ

(ツリソコナフ)

カイナチス

(カリナホス)

(借り直す)

ヨイヤウ

(ヨリアウ)

(寄り合ふ)

六、名詞法 名詞として使はるゝ場合、終止法にトを添ふ。

ユクトハ ヤスカ

(ユクノハ)

(行くは)

ヨムトチ キイタ

(ヨムノチ)

(読むを)

トプトバ ミロ

(トブノチ)

(飛ぶをば)

七、命令法 動作を命令する場合 文語に同じい。

ユケ

タテ

ヨメ

ツレ

禁止の場合にも

ユクナ タツナ

なほ多くは文語と同じいが、只、ヲ行たけが

ツンナ(釣ルナ) フンナ(降ルナ)

トルはンにかはる

東京邊にては動詞の上にオを副へてイ列音を命令法に用ふるとがある。

オ・ヨミ オ・ヨシ オ・アガリ

八、疑問法 問ひかくる場合 ウ列音にカを添ふると文語に同じい

サクカ。 カスカ。 シヌカ。 トブカ。

ヨムカ。 ツツカ。 ツーカ。 カウカ

カ行のクは強き音につゞく場合には、其の母音がぬけて、促音に發音さるゝ場合が多い。即、サツケン、(Sake)、サツカ (Saka)、などの様に發音さるゝ。

第二類動詞の法

一、終止法　ウ列音に促音ツをつくる。

賞を　ウクッ。　(ウクル)　(受く)

石を　アクッ。　(アグル)　(舉ぐ)

馬が　ハスッ。　(ハスル)　(馳す)

家を　タツッ。　(タツル)　(建つ)

職を　カヌッ。　(カヌル)　(兼ね)

竹を フスブッ。(フスブル) (燻ぶ)

髪を ソムッ。(ソムル) (染む)

体が コユッ。(コユル) (肥ゆ)

九州以外にはかくエ、ウの語尾を持つてゐる動詞を使ふ所は少ない。この種の動詞は其のエ列音にルをそへて ウケル サ、ゲル ハセル などのふ。

二、連体法 終止法と同じい。

ウクッ 時 (ウクル) (受くる)

ササグッ 時 (サ、グル) (捧ぐる)

ハスッ 時 (ハスル) (馳する)

タツッ時 (タツル) (建つる)

カヌッ時 (カヌル) (兼ねる)

フスブッ時 (フスブル) (燻ぶる)

ソムッ時 (ソムル) (染むる)

コユッ時 (コユル) (肥ゆる)

文語にては終止法の形と違つてをる。

三、前提法假定 終止法の形にギイを添ふる。

ウクッギイ (ウクルナラ) (受けは)

ササグッギイ (サ、グルナラ) (捧けは)

ハスッギイ (ハスルナラ) (馳せは)

タツッギイ

(タツルナラ)

(建てば)

ソムッギイ

(ソムルナラ)

(染めば)

コユッギイ

(コユルナラ)

(肥わば)

「ギイ」の代に「ナイバ」をも用ふる。その場合には語尾の促音ツの代にンを添ふる。

ウクンナイバ

ササグンナイバ

ハスンナイバ

タツンナイバ

ソムンナイバ

コユンナイバ

四、前提法確定 終止法の形にケンを添ふる。

ウクッケン

(ウクルカラ)

(受くれば)

ササグッケン (サ、グルカラ) (捧ぐれば)

ハスッケン (ハスルカラ) (馳すれば)

タツッケン (タツルカラ) (建つれば)

ソムッケン (ソムルカラ) (染むれば)

コユッケン (コユルカラ) (肥ゆれば)

五、熟語法 エ列音より續くると文語と同じい。

ウケ・トル タテ・ハジム コエ・フトル

六、名詞法 終止法の形にトを添ふる。

ソムットチ カウ (ソムルノチ) (染むるを)

コユットチ キラウ (コユルノチ) (肥ゆるを)

第二編 言語の部 第二類 動詞の法

ハル ットチ マツ (ハル、ノチ) (晴るゝを)

ツトム ットハ ナイ (ツトムルノハ) (勉むるは)

七、命令法 エ列音に口を添ふる。

ウケロ (受けよ)

サ、ゲロ (捧げよ)

ハセロ (馳せよ)

ソメロ (染めよ)

コエロ (肥ゆる)

禁止の場合には矢張ルガに變りて

ウクンナ (受クルナ) ソムンナ (染ムルナ)

といふ。以下三類四類の動詞皆同じ。

この種の動詞も東京邊にては上にオを副へて命令法にエ列音を用ふるとがある。

オ・ウケ オ・イデ オ・タベ オ・ヤメ

八、疑問法 終止法の形にカを添ふる。

ウクッカ (受くるか)

タツッカ (建つるか)

カヌッカ (兼ねるか)

ソムッカ (染むるか)

コユッカ (肥ゆるか)

第三類動詞の法

一、終止法 イ列音に促音ツを添ふる。

早く オキッ。
(オキル)

(起く)

そこを スギッ。
(スギル)

(過ぐ)

柿が オチッ。
(オチル)

(落つ)

手を ネヂッ。
(ネヂル)

(振ぶ)

人に ニッ。
(ニル)

(似る)

着物が ヒッ。
(ヒル)

(干る)

人に コビッ。
(コビル)

(媚が)

月を ミッ。 (ミル) (見る)

釣を ココロミッ。(コ、ロミル) (試む)

二階を オリッ。 (オリル) (下る)

豊前豊後地方にては、文語同様にウ列音に オクル オツル ヨブル オル、などいふ様である。然し文語のやうにイ、ウ列の語尾のみではなくてエウ列の語尾のがある。即、オツ(テ) オル(レ) などが多い。

二、連体法 終止法と同じ形である。

オキッ 時 (オキル) (起くる)

オチッ 時 (オナル) (落つる)

ミッ 時 (ミル) (見る)

キッ 時

(キル)

(着る)

オリッ 時

(オクル)

(下る)

文語にては終止法の形と違つてゐる。

三、前提法假定 終止法の形に「ギイ」を添ふる。

オキッギイ

(オキルナラ)

(起きば)

オチッギイ

(オチルナラ)

(落ちば)

ミッギイ

(ミルナラ)

(見ば)

ニッギイ

(ニルナラ)

(似ば)

オリッギイ

(オリルナラ)

(下りば)

「ギイ」の代に「ナイバ」を添へて假定を表すともある。その場合には語尾

の促音がンに變ると第二類の場合と同様である。

オキンナイバ オチンナイバ

ミンナイバ ニンナイバ

四、前提法確定 終止法の形に「ケン」を添ふる。

オキッケン (オキルカラ) (起くれば)

オチッケン (オナルカラ) (落つれば)

ミッケン (ミルカラ) (見れば)

ニッケン (ニルカラ) (似れば)

オリッケン (オリルカラ) (下るれば)

五、熟語法 文語と同じい。

オキ・アガル オチ・ソコナウ

六、名詞法 終止法の形に「ト」を添ふる。

オリットチ ミタ (オリルノチ) (下るゝを)

ツキットチ マツ (ツキルノチ) (盡くるを)

オチットチ ヒロウ (オチルノチ) (落つるを)

七、命令法 イ列音に口を添ふる。

オキ口 (起きよ)

チチ口 (落ちよ)

ミ口 (見よ)

ニ口 (似よ)

オイロ

(オリロ)

(おりよ)

ラ行のりはイ變へていふ。

この種の動詞も東京邊にてはイ列音をそのままに用ふるとがある

オ・オキ

オ・ミ

オ・オリ

八、疑問法 終止法の形に「カ」を添ふる。

オキツカ

(オキルカ)

(起くるか)

オチツカ

(オチルカ)

(落つるか)

コビツカ

(コビルカ)

(媚ぶるか)

ミツカ

(見るか)

ニツカ

(似るか)

オリッカ

(オリルカ)

(下るゝか)

第四類動詞の法

一、終止法

人が

クッ

(クル)

(く)

仕事を

スッ

(スル)

(す)

二、連体法

クッ時

(クル)

(來ッ)

スッ時

(スル)

(爲ス)

三、前提法假定

クッギイ

(クルナラ)

(こば)

スッキイ

(スルナラ)

(せば)

クンナイバ

スンナイバ

四、前提法確定

クッケン

(クルカラ)

(來^ッれば)

スッケン

(スルカラ)

(爲^スれば)

五、熟語法

キ・カクル

シ・ハジム

六、名詞法

クツトチ キラウ (クルノチ) (來るを)

スツトワ ナカ (スルノハ) (爲るは)

七、命令法

コイ (こよ、こ)

セロ (せよ)

これも オ・キ オ・シ など用ふるとがある。

八、疑問法

クツカ (くるか)

スツカ (するか)

この外、動詞の命令法に、一種特別なものがある。多くは東部地方に行は

る語にて、目下に向ひ使はるゝ。

一、イカイ(行け) ヨマイ(讀め) ツライ(釣れ)

二、ウケサイ(受けよ) カエサイ(代へよ)

三、オキサイ(起きよ) ミサイ(見よ)

四、キサイ(こよ) サイ(せよ)

又、クル 來 といふ動詞に限ぎり

コライ 來よ

といふものもある一般には行はれない様である。

又、禁示を表す時はこれに「ナ」を添へて

一、イカイナ(行くな) ヨマイナ(讀むな)

- 二、ウケサイナ(受くな) カエサイナ(代ふな)
 三、オキサйна(起くるな) ミサイナ(見るな)
 四、キサйна(來な) サйна(すな)
- とらふ

此の發音はサイと助辭は鼻にかけて發音さるゝ。

1. inkai, yonwai,
2. ukensai, kaensai.
3. Okinsai, minsai,
4. Kinsai, nsei,

助 辭

助辭を二つに別けて、法なもつてをるものともたないものと二つにする。前

のを助辭といひ、後のを單に助辭といふ。

助 動 辭

助動辭は法を持つてをる助辭である。助動辭には動詞につく者、形容詞につくもの又は名詞、代名詞等につくものもある。

一、スツ サスツ は文語の ス サス と同じもので他をして、なさする意を表ものである

答を イワ。スツ。

(イハスル)

(云はす)

塵を ステ。サスツ。

(ステサスル)

(捨てさす)

早く オキ。サスツ。

(オキサスル)

(起ささす)

人に コラスッ。

(來さす)

事を サスッ。

(サスル)

(爲さす)

二、ルッラルルッ は文語の ルラル と同じもので、他にかけらるゝ意を

表するものである。

人から ワラワルッ。

(ワラハルル)

(笑はる)

人から ステラルッ。

(ステラルル)

(捨てらる)

人から ミラルッ。

(ミラルル)

(見らる)

人から コラルッ。

(コラルル)

(こらる)

人から アイセラルッ。(アイセラルル)

(愛せらる)

三、ン は文語の ズ と同じもので、打消す意を表するものである。

ヨマン (ヨマヌ、ナイ) (讀ま^ず)

ステン (ステヌ、ナイ) (捨て^ず)

オキン (オキヌ、ナイ) (起き^ず)

コン (コヌ、ナイ) (こ^ず)

セン (セヌ、セナイ) (せ^ず)

四、ウ は文語の ム と同じものを想像の意を表すものである。

ヨマーウ (MO) (讀ま^む)

ステーウ (SINU) (ステヨ^ーウ) (捨て^む)

オキーウ (KYU) (オキヨ^ーウ) (起き^む)

コーウ (KU) (ユヨ^ーウ) (來^む)

セーウ (syu)

(シーヨウ)

せむ

エ列音にウが添うて引音に發音さるゝ場合には、音韻の部に述べておいた様に、イーウ (ユーウ) と發音さるゝ。即、ステーウは スナーウ、ヤミーウ || ヤミーウ、アテーウ || アナーウ、セーウ || シーウ、又、オウ || ウーウ であるから ユーウ || クーウ と發音さるゝのである。

五、タ (ダ) は文語の ヌ・タリ キ などと同じ意にて動作の過ぎた意に用ひらるゝものである。

キヤーアタ

(カイタ)

(書きぬ、き)

ステタ

(捨てぬ、き)

オキタ

(起きぬ、き)

キタ

(きぬ、き)

シタ

(しぬ、き)

第一類の動詞にタが添はる場合には動詞の發音が行によりて、種々に變る。

カ行

キヤアタ

(カイタ)

(書きぬ、き)

サ行

シャアタ

(サイタ)

(咲きぬ、き)

タ行

タッタ

(立ちぬ、き)

ナ行

シندا

(死にぬ、き)

バ行

トندا

(飛ひぬ、き)

マ行

ヨندا

(讀みぬ、き)

ラ行

ツッタ

(釣りぬ、き)

ワ行

カウタ

(買ひぬ、き)

第二編 言語の部 助動辭

右の様にカ行とサ行とはイ列音の父音がぬけてイとなり、そのイが上の音と合して、拗音の引音に發音さるゝが通常である、今、試みに羅馬字で綴つみよらう。

Kak i—ta, Kaita, Kyā—ta. Ai=yā
 Mas i—ta, Mai—ta, Myā—ta, Ai=yā
 toki—ta, toi—ta, tā—ta, Oi=e
 Kos i—ta, Koi—ta, Kē—ta, Oi=e
 Kiki—ta, Kii—ta, Ki—ta, I=i
 Seki—ta, Sei—ta, Sē—ta, ei=e
 Uki—ta, ui—ta, I—ta, ui=wē
 Muki—ta, Mui—ta, MI—ta, mī=i

即、アイはヤーア、イイはイーイ、ウイはイーイ、又は井ーイ、エイ、オイは

エーエと發音さるゝと、音韻の部にてのべた通である。

タ行とラ行とは其の母音がぬけて、父音が促音に發音さるゝのは普通である。

ナ行とバ行とマ行とは其の母音がぬけて、父音が發音に發音さるゝのも、亦普通である。而してかゝる場合にはタはダと變るのである。

バ行とマ行とワ行とは又引音に發音さるゝとがある。即、トーウ(飛)ダ

ヨーウ(讀)ダ オモウ(思)タ などの様である。バ行、マ行は引音に發音

さるゝ場合にも矢張、タはダに變る。

ワ行は關西にては引音に發音さるゝとか多いやーうであるけれども、關東にては促音に發音さるゝやーうである。即、思ッテ 云ッテ 買ッテ など發音さるゝ。

序に、クウ (食) といふ動詞は一種特別に云はるゝやうであるが、この動詞の語が ルッ、スッ、ン、ウ、などにつゞく場合には クッルッ、クッスッ、クワン、クワーウ、とクワが常に拗音に發音さるゝとが多い。又、タにつゞく場合にはク、ウ、タとなるべき筈なれど特別にウを省いて單にク、タといふとが多いやうである。

六、トット、トウ は文語の タリ などと同じ意にて、動作の打ち續く場合とか或は結果が残つてゐる場合に用ひらるゝ。トッは東部地方に重に行はれ、ト、ウは西部地方に用ひらるゝ様である。

花が

シャアトッ、ト、ウ

(サイテヰル)

(咲きたり)

雨は

ハレトッ、ト、ウ

(ハレテヰル)

(晴れたり)

孰も オキトッ、ト、ウ (オキテ井ル) (起きたり)

人が キトッ、ト、ウ (キテ井ル) (來^{*}たり)

ト、ウが動詞に續くのはタが動詞に續くのと同じさまである。

七、タラ、ウ は文語の ヌラム ケム など、同じ意にて過去の想像に用ひらるゝ。

花が シ、アタラ、ウ (サイタラウ) (咲きけむ)

雨は ハレタラ、ウ (咲きぬらむ)

人は オキタラ、ウ (起きけむ)

孰も キタラ、ウ (きぬらむ)

タラ、ウはタといふ過去の助動辭にラ、ウといふ想像の辭が添うたのである

る。

八、トラウ は文語の タラム と同じ意にて トットウ の想像であ

る。

花が シャアトラウ (サイテナラウ) (咲きたらむ)

雨は ハレトラウ (ハレテナラウ) (晴れたらむ)

人は オキトラウ (オキテナラウ) (起きたらむ)

孰も キトラウ (キテナラウ) (來たらむ)

九、ゴザラツ (東部) ゴザリア (西部) ゴサルの訛 文語の タヤフ など、

同じく他の人の動作を敬ひていふ時に用ひらるゝ

書を ヨミ・ゴザツ、ゴザリア (讀みたまふ)

塵を ステ・ゴザッ、ゴザア (捨てたまふ)

早く オキ・ゴザッ、ゴザア (起きたまふ)

皆 キ・ゴザッ、ゴザア (來たまふ)

「ゴサッ」「ゴザア」が「リ」に續く時には「リ」はイに變る。

トイゴザッ (取りゴザル) ツイゴザッ (釣リゴザル)

カイゴザッ (借リゴザル) オイゴザッ (下リゴザル)

間には「レ」に續く時「レ」が「イ」に變るともある。

クイゴザッ (クレゴザル)

十、ンサッ 東部(ンサーア) (西部) ナサルの訛 これもまた敬意を表する

語である。

書を ヨミ・ンサッ・ンサーア

塵を ステ・ンサッ・ンサーア

早く オキ・ンサッ・ンサーア

皆 キン・サッ・ンサーア

「ンサーア」が「リ」の語尾を持ちたる動詞に續く時には「リ」を省きて、直に其の語根に續く。

トン・サッ (取リナサル) ツン・サッ (釣リナサル)

カン・サッ (借リナサル) オン・サッ (居リナサル)

間にはレに續く時にも省かるゝ。

クン・サッ (クレナサル)

「ンサーア」のみでは目下の者に對して用ひらるゝけれども（但現在は同等にも用ふると稍、流行せり）動詞の上に「オ」を添へて

オ・ヨミ・ンサッ、ンサーア

オ・ステ・ンサッ、ンサーア

オ・オキ・ンサッ、ンサーア

などいふ場合には目上の人に對して用ひらるゝ上等な言葉である。併、この「オ」はどんな動詞にもつくとはいへない。

假令ば オ・來^キンサッ「オ・シンサッ」などはいはずとして オ・出^{イデ}ンサッ ナサッ
などいふ。

十一、ナリア も・ナサルの訛 また敬意を表はすものである。ナリアは ナ

ッ と促音に發音さるゝともある。

書を ヨミ・ナ・ア

塵を ステ・ナ・ア

早く オキ・ナ・ア

皆 キ・ナ・ア

「ナ・ア」は「ンサツ」「ンサア」と同じ場合に用ひらるゝけれども、一般に用ひられない。鹿島附近に重に用ひらるゝ様である。

十二、ミヤ・ア (Mia) は文語の マシ と同じ意である。

私は ユク・ミヤ・ア (ユクマイ) (行くまじ)

本は ヨム・ミヤ・ア (ヨムマイ) (讀むまじ)

「ミヤア」が動詞の語尾「ル」に續く時はその「ル」は常に「ン」に變る

雨は フン・ミヤア (フルマイ) (降るまじ)

是は ウクン・ミヤア (ウクルマイ) (受くまじ)

私は オキン・ミヤア (オキルマイ) (起くまじ)

誰も クン・ミヤア (クルマイ) (くまじ)

何も スン・ミヤア (スルマイ) (すまじ)

十三、ゴタツ (東部) ゴタア (西部) ゴトアルの訛 文語の ゴドシと同

じ意である。

人の ユクゴタツ、ゴタア (行くごとし)

山の クヅルッゴタツ、ゴタア (崩るゝごとし)

誰か クツ・ゴタツ、ゴターア

(くるごとし)

音は カノ・ゴタツ、ゴターア

(蚊のごとし)

高さ ヤマン・ゴタツ、ゴターア

(山のごとし)

「ゴタツ」「ゴターア」が動詞に續く時は終止法の形に添ふ。名詞に續く時は、二音以上の名詞には「ン」より受け

山^{ヤマ}ン・ゴタツ、

川^{カハ}ン・ゴタツ、

人^{ヒト}ン・ゴタツ、

一音の名詞、又は母音鼻音を以て終る名詞には「ノ」より受く

蚊^カノゴタツ、

齒^ハノゴタツ、

毛^ケノゴタツ、

犀^{サイ}ノゴタツ、

豹^{ヒヤウ}ノゴタツ、

牛^{ウシ}ノゴタツ、

判^{ハン}ノゴタツ、

天^{テン}ノゴタツ、

北^ペ京^{キン}ノゴタツ、

代名詞のヨイ (是) ソイ (其) アイ (彼) ダイ (誰) ドイ (ドレ) などに
續く時は「ガ」より添ふ。

コイガ・ゴタッ アイガ・ゴタッ

十四、デガッス デゴザリマスの訛 文語の ナリ と同じ意にて指定する

語である、但、敬意を含みてゐる。

卽、ニ侍リ ニテ候 と同じい、名詞、代名詞に添ふ。

(ユノ語は西部にのみ通用して東部にてはいはない)。

山・デガッス (山デアリマス) (山にて候)

私・デガッス (私デアリマス) (私にて侍り)

十五、ゴザッス ガッス と同じ意にて ガッス よりも上等な言葉である

山・デゴザッス (山デゴサイマス)

私・デゴザッス (私デゴザイマス)

「ゴザッス」を今、一段上等にいふ時には「ゴザイマス」といふ。

十六、 ジャア 文語の ナリ と同じ意である。

山・ジャア (山ダ) (山なり)

私・ジャア (私ダ) (私なり)

十七、 マッスンゴザア (Massungozā) マッセンゴザア (Massengozā) 共に敬意を表す言葉である。これも西部にて多く用ひらるゝ様である。

ヨミ・マッスンゴザア (ヨミマスルデゴザイマス)

ステ・マッスンゴザア (ステマスルデゴザイマス)

キ・マッスンゴザア

(キマスルデゴザイマス)

ヨミ・マッセンゴザア

(ヨミマセンデゴザイマス)

ステ・マッセンゴザア

(ステマセンデゴザイマス)

キ・マッセンゴザア

(キマセンデゴザイマス)

助動辭の法

第一、スッ サスッ

終止法

クワスッ。

(クハスル)

(食はず)

ステサスッ。

(ステサスル)

(捨てさす)

オキサスッ。 (オキサスル) (起きさせる)

連体法

クワスッ時 (クハスル) (食はする)

ステサスッ時 (ステサスル) (捨てさせる)

オキサスッ時 (オキサスル) (起きさせる)

前提法假定

クワスッギイ (クハスルナラ) (食はせば)

ステサスッギイ (ステサスルナラ) (捨てさせば)

オキサスッギイ (オキサスルナラ) (起きさせば)

又「ギイ」の代に「ナイバ」を添ふる時は語尾の「ッ」が「ン」に變りて

左のてとくなる。

クワスンナイバ ステサスンナイバ

オキサスンナイバ

前提法確定

クワスッケン (クハスルカラ) (食はすれば)

ステサスッケン (ステサスルカラ) (捨てさすれば)

オキサスッケン (オキサスルカラ) (起きさすれば)

熟語法

クワセスギル ステサセチル

命令法

クワセロ。

(食はせよ)

ステサセロ。

(捨てさせよ)

オキサセロ。

(起きさせよ)

疑問法

クワスツカ。

(食はするか)

ステサスツカ。

(捨てさするか)

オキサスツカ。

(起きさするか)

第二、ルツ ラルツ

終止法確定

クワルツ

(クハルル)

(食はる)

ステラル^ッ (ステラルル) (捨てらる)

連体法

クワル^ッ時 (食はる)

ステラル^ッ時 (捨てらる)

前提法假定

クワル^ッギイ (クハルルナラ) (食はれば)

ステラル^ッギイ (ステラルルナラ) (捨てられれば)

「ギイ」の代に「ナイバ」添ふれば「ッ」が「ン」に變ると「スッ」「サスッ」に同じ。

前提法確定

クワルッケン、

(クハルルカラ)

(食はるれば)

ステラルッケン、

(ステラルルカラ)

(捨てらるれば)

熟語法

クワレカ、ル

ステラルハジム

命令法

クワレロ。

(食はれよ)

ステラレロ。

(捨てられよ)

疑問法

クワルツカ。

(食はるか)

ステラルツカ。

(捨てらるか)

終止法

ヨマン

(ヨマナイ、ヌ)

(讀まず)

ステン

(ステナイ、ヌ)

(捨てず)

オキン

(オキナイ、ヌ)

(起きず)

連体法

ヨマン時

(ヨマナイ、ヌ)

(讀まぬ)

ステン時

(ステナイ、ヌ)

(捨てぬ)

オキン時

(オキナイ、ヌ)

(起きぬ)

前提法假定

ヨマンガイ

(ヨマヌナラ)

(讀まずば)

ステンギイ

(ステヌナラ)

(捨てずば)

オキンギイ

(オキヌナラ)

(起きずば)

「ギイ」の代に「ナイバ」を添ふれば

ヨマンナイバ

ステンナイバ

オキンナイバ

前提法確定

ヨマンケン

(ヨマヌカラ)

(讀まねば)

ステンケン

(ステヌカラ)

(捨てねば)

オキンケン

(オキヌカラ)

(起きねば)

接續法

ヨマ・ジイ、

(ヨマ・ズニ、ナイデ)

(讀まずして)

ステ・ジイ、

(ステ・ズニ、ナイデ)

(捨てずして)

オキ・ジイ、

(オキ・ズニ、ナイデ)

(起きずして)

疑問法

ヨマ・ンカ、

(ヨマ・ヌカ、ナイカ)

(讀まぬか)

ステ・ンカ、

(ステ・ヌカ、ナイカ)

(捨てぬか)

オキ・ンカ、

(オキ・ヌカ、ナイカ)

(起きぬか)

第四、ウ

終止法

ヨマ、ウ

(ヨマ、ウ)

(讀まむ)

ステーウ (チーウ) (ステヨウウ) (捨てむ)

オキーウ (オキヨウウ) (起きむ)

ミーウ (ミヨウウ) (見む)

コーウ (クーウ) (キヨウウ) (來む)

セーウ (シューウ) (シヨウウ) (爲む)

「エーウ」も「イーウ」も引音に發音する時には「ユ」の引音「ユウ」に變るとは音聲の部に述べたる通である。そこで

テーウ は チュウ セーウ は シーウ

と發音さるゝのである。

又、「オーウ」はウの引音「ウウ」と發音さるゝから

コ、ウ は ク、ウ

と發音さるゝのである

前提法確定

ヨマ、ウケン、

(ヨマウカラ)

(讀むべければ)

ステ、ウケン、

(ステヨウカラ)

(捨つべければ)

オキ、ウケン、

(オキヨウカラ)

(起くべければ)

疑問法

ヨマ、ウカ、

(讀まむか)

ステ、ウカ、

(ステヨウカ)

(捨てむか)

オキ、ウカ、

(オキヨウカ)

(起きむか)

第五、タ (ダ)

終止法

キヤアタ

(カイタ)

(書きぬ、き)

ステタ

(ステタ)

(捨てぬ、き)

オキタ

(オキタ)

(起きぬ、き)

連体法

キヤアタ時

(カイタ)

(書きぬる、じ)

ステタ時

(ステタ)

(捨てぬる、じ)

オキタ時

(オキタ)

(起きぬる、じ)

前提法假定

キヤ アタナイバ

(カイタナラ)

(書きなば)

ステタナイバ

(ステタナラ)

(捨てなば)

オキタナイバ

(オキタナラ)

(起きなば)

前提法確定

キヤ アタケン

(カイタカラ)

(書きぬれば、しかば)

ステタケン

(ステタカラ)

(捨てぬれば、しかば)

オキタケン

(オキタカラ)

(起きぬれば、しかば)

接續法

キヤー アテ

(カイテ)

(書きて)

ステテ

(捨て)

オキテ

(起きて)

疑問法

キヤアタカ

(カイタカ)

(書きぬるか、じか)

ステタカ

(捨てぬるか、じか)

オキタカ

(起きぬるか、じか)

第六、トウ(ドゥ) トツ(ドツ)

終止法

キヤアトツ、トウ。

(カイ・テナル、テ井ル)

(書けり)

ステトツ、トウ。

(スタ・テナル、テ井ル)

(捨てたり)

オキトツ、トウ。

(オキ・テナル、テ井ル)

(起きたり)

連体法

キヤアトツ、トウ時

(カイテナル、テ井ル)

(書ける)

ステトツ、トウ時

(ステテナル、テ井ル)

(捨てたる)

オキトツ、トウ時

(オキテナル、テ井ル)

(起きたる)

前提法假定

キヤアトツ、ギイ

(カイテナルナラ)

(書きたれば)

ステトツ、ギイ

(ステテナルナラ)

(捨てたれば)

オキトツ、ギイ

(オキテナルナラ)

(起きたれば)

「ギイ」の代に「ナイバ」を添ふる時には

キヤアトンナイバ

ステトンナイバ

となる

前提法確定

キヤアトッケン

(カイテナルカラ)

(書きたれば)

ステトッケン

(ステテナルカラ)

(捨てたれば)

オキトッケン

(オキテナルカラ)

(起きたれば)

方言の傍ガリにて「トッ」の代に「ト、ウ」を添ふるとあるは假定、確定とも同
じい即

キヤアトウギイ

キヤアト、ウナイバ

キヤアト、ウケン

又、普通口語の傍ガリにて、「テナル」の代に「テ、ル」を添ふるとも假定、確

定とも同じい。即

カイト井ルナラ

カイト井ルカラ

接續法

キヤアトッテ

(カイトナリテ、テ井テ)

ステトッテ

(ステテナリテ、テ井テ)

オキトッテ

(オキテナリテ、テ井テ)

疑問法

キヤアトッカ

(カイトナルカ)

(書きたるか)

ステトッカ

(ステテナルカ)

(捨てたるか)

オキトッカ

(オキテナルカ)

(起きたるか)

又、方言にて「ト₁ウ」を添ふれば

キヤアトウカ ステト₁ウカ オキト₁ウカ

普通口語にて「テ井ル」を添ふれば

カイテ井ルカ ステテ井ルカ オキテ井ルカ

第七、タラ₁ウ(タラ₁ウ)

終止法

キヤアタラ₁ウ (カイタラ₁ウ) (書き・ぬらむ、けむ)

ステタラ₁ウ (捨て・ぬらむ、けむ)

オキタラ₁ウ (起き・ぬらむ、けむ)

前提法確定

キヤアタラウケン

(カイダラウカラ)

ステタラウケン

(ステダラウカラ)

オキタラウケン

(オキダラウカラ)

疑問法

キヤアタラウカ

(カイダラウカ)

(書きぬらむか)

ステタラウカ

(捨てぬらむか)

オキタラウカ

(起きぬらむか)

第八、トラウ(ドラーウ)

キヤアトラウ

(カイテナラウ)

(書きたらむ)

ステトラウ

(ステテナラウ)

(捨てたらむ)

オキトラ、ウ

(オキテナラ、ウ)

(起きたらむ)

前提法確定

キャアトラ、ウケン

(カイテナラ、ウカラ)

ステトラ、ウケン

(ステテナラ、ウカラ)

オキトラ、ウケン

(オキテナラ、ウカラ)

疑問法

キャアトラ、ウカ

(カイテナラ、ウカ)

(書きたらむか)

ステトラ、ウカ

(ステテナラ、ウカ)

(捨てたらむか)

オキトラ、ウカ

(オキテナラ、ウカ)

(起きたらむか)

第九、ゴザッ、ゴザ、ア

終止法

カキゴザッ。ゴザア

(書き給ふ)

ステゴザッ。ゴザア

(捨て給ふ)

オキゴザッ。ゴザア

(起き給ふ)

連名法

カキゴザッ。ゴザア時

(書き給ふ)

ステゴザッ。ゴザア時

(捨て給ふ)

オキゴザッ。ゴザア時

(起き給ふ)

前提法假定

カキゴザッ。ゴザア、ギイ、ナイバ

(書き給はゞ)

ス、テ、ゴ、ザ、^ヅ、ゴ、ザ、^ア、ギ、イ、ナ、イ、バ
 (捨て給はゞ)
 オ、キ、ゴ、ザ、^ヅ、ゴ、ザ、^ア、ギ、イ、ナ、イ、バ
 (起き給はゞ)

前提法確定

カ、キ、ゴ、ザ、^ツ、ケ、ン、ゴ、ザ、^ア、ケ、ン
 (書き給へば)
 ス、テ、ゴ、ザ、^ツ、ケ、ン、ゴ、ザ、^ア、ケ、ン
 (捨て給へば)
 オ、キ、ゴ、ザ、^ツ、ケ、ン、ゴ、ザ、^ア、ケ、ン
 (起き給へば)

命令法

カ、キ、ゴ、ザ、イ
 (書き給へ)
 ス、テ、ゴ、ザ、イ
 (捨て給へ)
 オ、キ、ゴ、ザ、イ
 (起き給へ)

疑問法

カキゴザツカ、ゴザ、アカ

(書き給ふか)

ステゴザツカ、ゴザ、アカ

(捨て給ふか)

オキゴザツカ、ゴザ、アカ

(起き給ふか)

第十、ンサツ、ンサーア

終止法

カキンサツ、ンサーア

ステンサツ、ンサーア

オキンサツ、ンサーア

連体法

カキンサッ、ンサーア時

ステンサッ、ンサーア時

オキンサッ、ンサーア時

前提法假定

カキ・ンサッギイ、ンサーアギイ

ステ・ンサッギイ、ンサーアギイ

オキ・ンサッギイ、ンサーアギイ

「ギイ」の代に「ナイバ」を添ふるも同じい。

前提法確定

カキンサッケン、サーアケン

ステンサツケン、サ₁アケン
オキンサツケン、サ₁アケン

命令法

カキンサイ
ステンサイ
オキンサイ

疑周法

カキンサツカ、サ₁アカ、
ステンサツカ、サ₁アカ
オキンサツカ、サ₁アカ

第十一、ナリア

終止法

カキナリア

ステナリア

連体法

カキナリア

ステナリア

前提法假定

カキナリアギイ

ステナリアギイ

前提法確定

カキナ「アケン

ステナ「アケン

命令法

カキナイ、

ステナイ

オキナイ

疑問法

カキナ「アカ

ステナ「アカ

第十二、ミヤルア

終止法

カクミヤルア

(カクマイ)

(書くまじ)

スツンミヤルア

(スツルマイ)

(捨つまじ)

オキンミヤルア

(オキルマイ)

(起くまじ)

クンミヤルア

(クルマイ)

(くまじ)

スンミヤルア

(スルマイ)

(すまじ)

前提法確定

カクミヤルアケン

(カクマイカラ)

(書くまじければ)

スツンミヤルアケン

(スツルマイカラ)

(捨つまじければ)

オキンミヤアケン (オキルマイカラ) (起くまじければ)

疑問法

カクミヤアカ (カクマイカ) (書くまじきか)

スツンミヤアカ (スツルマイカ) (捨つまじきか)

オキンミヤアカ (オキルマイカ) (起くまじきか)

第十三、ゴダツ ゴターア (ゴターアの法ゴダツに同じ、故に畧す)

終止法

カクゴダツ (カクヤウダ) (書くでとし)

山ゴダツ (山ノヤウダ) (山のでとし)

連体法

ヨムゴタッ 聲

(ヨムヤウナ)

(讀むでとぢ)

山ンゴタッ 者

(山ノヤウナ)

(山のでとぢ)

前提法確定

イウゴタッ ギイ

(イウヤウナラ)

(云ふでとくは)

山ンゴタッ ギイ

(山ノヤウナラ)

(山のでとくは)

前提法假定

イウゴタッ ケン

(イフヤウダカラ)

(云ふでとくなれば)

山ンゴタッ ケン

(山ノヤウダカラ)

(山のでとくなれば)

副詞法

イウゴト

(イウヤウニ)

(云ふでとく)

山ンゴト

(山ノヤウニ)

(山のごとく)

接續泣

イウゴトシテ

(イウヤウニシテ)

(云ふごとくして)

山ノゴトシテ

(山ノヤウニシテ)

(山のごとくして)

第十四、デガッス デゴサッス

終止法

山デガッス

(山デス)

私デゴサッス

(私デゴサイマス)

連名法

山デガッスッ時

(山デス)

私デゴザッスッ時 (私デゴザイマス)

前提法假定

山デカッスッギイ (山デスナラ)

山デゴザッスッギイ (山デゴザイマスナラ)

前提法確定

山デカッスッケン (山デスカラ)

私デゴザッスッケン (私デゴザイマスカラ)

接續法

山デガッシテ (山デシテ)

山デゴザッシテ (山デゴザイマシテ)

疑問法

山デカッスツカン (山デスカ)

私デゴザッスツカン (私デゴザイマス)

第十五、ジャッ ジャーア

終止法

山ジャーア (山ダ)

前提法假定

山ジャーアギーイ (山デアルナラ)

前提法確定

山ジャーアケン (山ダカラ)

第十六、マッスンゴザア マッセンゴサア

終止法

ヨミマッスンゴザア (ヨミマス)

ヨミマッセンゴザア (ヨミマセン)

連体法

ヨミマッスンゴザア時 (ヨミマス)

ヨミマッセンゴザア時 (ヨミマセン)

前提法假定

ヨミマッスンゴザアギイ (ヨミマスナラ)

ヨミマッセンゴザアギイ (ヨミマセンナラ)

前提法確定

ヨミマッスンゴザアケン (ヨミマスカラ)

ヨミマッセンゴザアケン (ヨミマセンカラ)

疑問法

ヨミマッスンゴザアカン (ヨミマスカ)

ヨミマッセンゴザアカン (ヨミマセンカ)

助 辭

法を持ちたるものを助動辭といふに對して、法をもたぬのを單に助辭といふ。一、名詞、代名詞が動詞、形容詞等の主なる時に添ふもの

○
ン

ハナン

咲く。

(ハナガ)

(花の、が)

カキン

倒れタ。

(カキガ)

(垣の、が)

ハルン

さタ。

(ハルガ)

(春の、が)

アメン

降る。

(アメガ)

(雨の、が)

ヒトン

通る。

(ヒトガ)

(人の、が)

かく二音以上より成りてゐる主格名詞で、其の末音が子音である場合には必、ンが添る。ンはノの父音である。普通口語にてはガ、文章にては、ノ又はガがる場合である。

○
ノ

カノ 食ふ。 (カガ) (蚊の、が)

キノ 倒れタ。 (キガ) (木の、が)

フノ 煮ゑタ。 (フガ) (麩の、が)

ケノ 生ゑタ。 (ガケ) (毛の、が)

コノ 泣く。 (ユガ) (子の、が)

一音より成りてゐる、名詞、が主格である時はノを添ふるが、普通である。

タ₁アノ 倒れタ。 (タルガ) (樽の、が)

カ₁イノ 折れタ。 (カイガ) (權の、が)

チ₁イノ か₁ツタ。 (ツユガ) (露の、が)

ス₁ウノ 合はヌ。 (ス₁ウガ) (數の、が)

ノ、ウノ 始る。

(ノ、ウガ)

(能の、が)

ウンノ 悪イ

(ウング)

(運の、が)

引音、撥音、又はイが主格名詞の末音である時にはノが添るのが普通である

○ ガ

風より アメガ 多イ。

ハナガ 美しイ。

カガ 一番 うるさイ。

など比較する場合、又は

タラ、ウガ きタ (太郎が)

サンスケガ 働イテ井ル。 (三介が)

ゴンベエガ 行イタ。 (權兵衛が)

がなご特別名詞にはガを添ふる場合が多いやうである

代名詞が主格である場合には趣が差つてゐる。

ワタクシガ 云ふ。 (私が)

ソイガ 悪イ。 (ソレガ) (其が)

アイガ・よイ。 (アレガ) (彼が)

アッチガ 廣イ。 (アキラガ)

ドイガ 善カラウ (ドレガ) (孰が)

ダガ 爲タカ (誰が)

代名詞が主となる場合にはガがそふ場合が多いけれども、對稱にはノを添ふる事が通常である。

ワイノ 云うタ。

オトノ・持つてきた。

(オマヘガ)

オマイノ オ云ひナサツタ。

(オマヘガ)

アナタノ オ云ひナサイマシタ。

(アナタガ)

これも亦子音より受くる時はノガンに變るとが多い。

オトン 云うタ。

アナタン オ云ひナサイマシタ。

二、名詞、代名詞が他の名詞の意味を定むる場合

○
ン

サクラン 花

(櫻の)

ナレン 花

(梨の)

ツルン 聲

(鶴の)

ウメン 花

(梅の)

モモン 花

(桃の)

○
ノ

カノ 聲

(蚊の)

キノ 葉

(木の)

スノ 味

(醋の)

第二編 言語の部 助辭

ケノ 穴

(毛の)

コノ 親

(子の)

タ₁アノ 中

(樽の)

タイノ 魚

(鯛の)

ル₁ウノ 中

(牢の)

ノ₁ウノ 舞

(能の)

モンノ 内

(門の)

引音にはンを添ふるともある。

ル₁ウノ 中

(牢の)

ト₁ウキ₁ャ₁ウ₁ン 者

(東京の)

代名詞が他の名詞を定限する場合

○ン

ワタクシン 本

(私の)

アナタン 處

(アナタノ)

アレシ 宿

(アレノ)

(彼の)

ダレン 子

(ダレノ)

(誰の)

○ガ

オイガ 本

(ワタクシガ)

(己の)

アイガ 宿

(アレガ)

(彼が)

コイガ 根性

(コレガ)

(是が)

ウンガ 頭

(ウメガ)

(奴が)

かく母音のイ又は撥音より續く時にはガが添うけれどもワイの下には特別にノが添ふやうである。

ワイノ 心

(汝が)

「ユ」「ッ」「ア」「ド」などいふ代名詞にノが添うて他の名詞を定限する時には、其のノはンに變り、

コン 人

(コノ)

(此の)

ソン 時

(ソノ)

(其の)

アン 時

(アノ)

(彼の)

ドン 人

(ドノ)

(孰の)

といふ。又、オマエなどはエは母音であるけれども、

オマエン 内 (オマヘノ) (御前の)

ともいふやうである。とかく代名詞は其の語により習慣がまち／＼である。

三、名詞、代名詞が動詞、形容詞の賓として用らるゝ場合

○ ナ

鳥が エ 食ひナル。 (エナ) (餌を)

私も メシ 食ふ。 (メシナ) (飯を)

かくナを省く場合が多い様である。

○ ナ

鳥が エチバ 食ひチル。

(餌をば)

鳥が エバ 食ひチル。

(餌をば)

酒ば 飲む。

かく佐賀地方にてはチバと正しく云ふともあるがバを添へていふとが多い。

○ イ

オーホサカイ 行く。

(オーホサカニ)

(大阪に)

(ōsak yā)

ムサシニ 在る。

(ムサシニ)

(武藏に)

オーホツイ 行く。

(オホツニ)

(大津に)

(ōti)

カ₁ウベ₁イ 居る

(カウベニ)

(神戸に)

(Kobe)

キ₁ウト₁イ 行く。

キヤ₁ウトニ

(京都に)

(Kyoto)

イガ、上のアウエオなどの音と合して、引音に發音さるゝ場合には、音に變化を生ずるとは、度々述べた通りである。即、アイ₁ヤ₁ア、イ₁イ₁イ₁、ウ₁イ₁イ₁イ₁、井₁イ₁、エ₁イ₁エ₁エ₁、オ₁イ₁エ₁エ₁、名詞の末音にイがある時には、其のイはいつもりに變りてそれが引音に發音さるゝ。

シヤ₁ンハ₁リ₁イ せく。

(シヤンハイニ)

(上海に)

ヘ₁イタ₁リ₁イ 行く。

(ヘイタイニ)

(兵隊に)

クワリーイ 行く。

(クワイに)。

(會に)

又シ及引音の下には文語と同じくニを添ふる。

トウキヤウニ 行く。

(東京に)

ダイワンニ 行く。

(臺灣に)

クワントウニ 行く。

(關東に)

ペキンニ 行く。

(北京に)

○ サン サマーイ (Samyā) サニヤア (Sanyā)

ヒカシサン 行いタ。

(ヒガシへ)

(東へ)

マエサン 向け。

(マへへ)

(前へ)

ムカウサマーイ 渡れ。

(ウカウへ)

(向へ)

(Samyā)

コツチサニャア 來イ。 (コナラへ) (此方へ)

「サン」「サマ、イ」「サニャア」皆同意である。「サン」は「サマ」(方)の訛にして、「サマイ」は「サマニ」の訛であらうか。又、「サニャア」は「サマイ」の訛であらう。

○ ヨイ

フデヨイ 黒が 高イ。 (フデヨリ) (筆より)

ユキヨイ 氷が 冷イ。 (ユキヨリ) (雪より)

文語にては「東京ヨリ歸ル」など動作の起点を示すにも用ふれども、方言にては、亦普通口語にては、較ぶる場合の外、用ひられない。

○ カア (Ka)

クニカ[、]ア 來タ。(クニカラ) (國より、から)

ア^ッチカ[、]ア 來タ。(アチラカラ) (彼方より、から)

この場合に於て文語にては「ヨリ」「カラ」共に用ひらるゝけれども方言にては「ヨリ」を用ふるとはない。

○ デ

カタナデ 殺す。(刀にて)

フデデ 書く。(筆にて)

動作をする道具となる賓格は皆、デを用ふる様である。

○ マデ は文語と違ひない。

○ テ

此は ナンテ 讀むか。 (ナント) (何と)

フデテ 讀む。 (フデト) (筆と)

直^{ズグ} クツテ 云ウタ。 (クルト) (來と)

コドモテ 云ふ 者は。 (コドモト) (小供と)

四、名詞、代名詞の主格、賓格、又は副詞などに添うて其の意を助くるもの

○ ア

ハナ^ハア 咲かん (ハナハ) (花は)

ウシ^ハア 食はん (ウシハ) (牛は)

(Usiyā)

マツ^ハア 生えん (マツハ) (松は)

(Matyē)

アセーア 出てン (アセハ) (汗は)

(Asyā)

ヒトーア 來ン (ヒトハ) (人は)

(Hitā)

「ア」は「ハ」の母音である。この「ア」は常に上の音と連合して引音に發音さるゝから、イ列音とか、エ列音に添ふ場合には拗音に發音にさるゝのである。即、ウシーア || シャア ソデーア || ソヂャーア などの通である。

ジブンア 來ン (ジブンハ) (自分は)

(jidunna)

「ア」が「ン」に添ふ場合には「ン」が「ア」に引つかゝりて「ア」は「ナ」^一ア」と發音さるゝ。即、ジブンナーア」と發音さるゝが通常である。クァンオン」(觀音)がクァンノンと發音さるゝと同じ理である。

シャ^ンハリ^ア 要港である。(シャ^ンハイ^ハ) (上海は)

(Shanharvā)

トケ^リア 持た^ン。(トケ^イハ) (時計は)

(tokeryā)

「ア」が「イ」添ふ場合には「イ」は常に「リ」と變りて、其の「リ」が「ア」と連合し拗音に「リヤア」と發音さるゝ。

引音の下には「ア」は添はないで普通に「ワ」が添ふ。

キ^イワ 和歌山縣。(キ^イハ) (紀伊は)

ダイ^スワ 出來^ン。(ダイ^スウ^ハ) (代數は)

ゴン^ベエ^ワ 種播^ク。(ゴン^ベエ^ハ) (權兵衛は)

キ^コウ^ワ 誰^カ。(キ^コウ^ハ) (貴公は)

○ モは文章語と同様に用ひらるゝ。

○ ズ、ヨソ、ナンなどは方言には殆、用ひられない。

○ バシ

ネコバシ 居タカ。

(猫や、居たる)

ニクバシ 食ヒタカ。

(肉や、食ひたる)

クニカ「アバシ 來タカ。

(國よりや、きたる)

ユキバシ するか。

(行きや、する)

クロ「ウバシ なッタカ。

(黒くや、なりたる)

ユカジ「イバシ 居る。

(行かずにや、居る)

「バシ」は普通口語にて「デモ「カ」といふ様な場合に用ひらるゝ様である

が文語にては疑辭の「ヤ」といふ場合に當てはまる様である。つまり強辭と見てよからう。

○ デャァ (ヂャ)

ワタシデャァ 無イ。 (ワタシデハ) (私にては)

コイデャァ 役立たヌ。 (コレデハ) (此にては)

キデャァ 造られン。 (キデハ) (木にては)

「デャァ」は「ニテハ」の訛であらう。「ヂャァ」と發音するものもある。

○ デン

ダイデン 來ン。 (タレデモ) (誰も)

ナンデン 食ふ。 (ナニデモ) (何も)

イチデン 食はン。(ウチデモ) (魚)

○ ドン

サケドン 飲まウ。(サケドモ) (酒)

ハナドン 見て來イ。(ハナドモ) (花)

サンポドン 爲ウカ。(サンポドモ) (散歩)

キドン 爲ンナラ。(キドモ)

キウドン 行いタ。(ケーフドモ)

○ ト

牛の アユムトア 遅イ。(アユムノハ) (歩むは)

櫻の サクタア 柳の サクトヨイモ 遅イ。

.....(サクノハ).....(サクノヨリ).....

.....(咲くは).....(咲くより).....

アナタントト ワタレントト 較べて 見ヨ、ウ

(アナタノト).....(ワタシノト).....

「ト」は普通口語にて「ノ」といふものと同じ意である。その語原は「コト」の「ト」にして、「モノ」「コト」などの意味であらう。

○ ノミ といふ言葉は方言では用ひない。

○ バカイ

ワタクシバカイ 使ふ (ワタクシばかり)

ヤサイバカイ 食はすル (ヤサイばかり)

即「バカイ」は「バカリ」なり

○ バッテン (atten)

今日は ヤスミバッテン 忙しイ。

(休ダケレド)

これは ヨカバッテン 嫌イダ。

(ヨイゲレドモ)

あれは ハタラクバッテン 弱イ。

(働クケレドモ)

「バッテン」は「ダケレド」又ハ「ケレドモ」の意にして 名詞にも動詞にも 形容詞にも添ふ。

○ グリヤア (gurya)

十里グリヤア 來タラウ。

(十里グラ井)

(Jurigurya)

粥グリヤア 食はルル。

(粥グラ井)

○ シユ

コイシユコ 讀んだ。 (ユレダケ) (是れほど)

ヨムシユコ 讀め。 (ヨムダケ) (讀むほど)

シユ はダケといふ様な意味にて、代名詞、動詞、に副ふ。

○ イツナヨウ (itcho)

メレイツチヨウ 食ウカ。

サケイツチヨウ 持ッて來イ。

コイイツチヨウ 爲ねばなるマイ。

ウタイツチヨウ 歌はぬか。

「イツナヨウ」は「一ツ」或は「一丁」「一度」といふ意に用ひらるゝとゆ

あれども、右の如きは「一ッ」といふ意もなく、又「二丁」といふ意味でなく單に語の調子に用ひらるゝものなり。「チョイト」といふ様な意なり。

五、話の終につくもの

○ カ

カ は文語と同じ様に用ひらるゝ、

○ カン

あれも ヒトカン (ヒトカ) (人か)

あすも クッカン (クルカ) (來るか)

これにて ヨカカン ヨッカン (ヨイカ) (善きか)

「カン」は疑問の「カ」に「ナ」を添へたものらしいが、「カ」と同様に用ひらるゝ。併し幾分か調子を柔かにする様にある。疑問を表す助辭「カ」

カン等が形容詞に添ふ場合には其の語尾のカが促音に變りて發音さるゝ
とが多し。

○ カイ

あれも ヒトカイ。

(ヒトカイ)

(人か)

あすも クツカイ。

(クルカイ)

(來るか)

カイは疑問の「カ」に「ヨ」を添へたものらしい。これは普通の口語に
も使ふやうである。

○ カーウ (Ko)

あれも ヒトカーウ。

あすも クツカーウ。

カーウ は カン の訛らとい。「カン」と同じ意に用ひらるゝが、多くは東部地方に通用するものにて幾分か下品にして荒い様な口氣を含みてゐる

○ ケーエ (Ke)

あれも ヒトケーエ

あすも クツケーエ

「ケーエ」も「カーウ」と同様に使はるゝが、これは筑後境方面に重に用ひられてゐる。

○ キャア (Kya)

あすも クツキャア。

「キャア」は「層卑」とい語として東部地方に使はれてゐる。

○ ハン

あれは ヤマバン (ヤマヅヨ)

あすも クッバン (クルヅヨ)

それも ヨカバン (ヨイヅヨ)

「バン」は自身が然か思ふとを人に表す時に用ふるものである普通口語にも、文語にも適當な譯が見出さない。

○ バイ

あれは ヤマバイ。(ヤマヅヨ)

あすも クッバイ。(クルヅヨ)

あれも ヨカバイ。(ヨイヅヨ)

「バイ」も「バン」とほぼ同じく、「ジ」「ジヨ」などの意に用ひらるゝ。

○ バール (bo)

あれは ヤマバール。

あすも クッバール。

あれも ヨカバール。

「バール」は「バン」の訛であらうが、「バン」同意にて卑しい語である。これは東部地方に重に用ひられてゐる。

○ タン

あれも ヤマタン (ヤマダヨ)

あすも クッタン (クルダヨ)

あれも ヨカタン (ヨイダヨ)

「タン」は「ダ」「ダヨ」などの意にて「パン」とほぼ同じ意であるけれども、これは自身が然か思ふのにあらずして事物が然る意を人に表はす場合に用ひらるゝ様である。

○ タイ

あれは ヤマタイ

あすも クッタイ

あれも ヨカタイ

「タイ」も「タン」と同様に用ひらるゝ。

「タイ」「タン」は想像の助辭より續く場合には「ダン」「ダイ」と濁る。

私も ヨマウダン。

おれは カヘラウダイ。

○ タイエーエ (taie) タイヨウ (taiyo)

あれも ヤマタイエーエ

あすも クッタイヨウ

「エーエ」「ヨウ」をどはタイに添うて、其の意を重くするものであるが、

西部地方にて用ひらるゝ卑しい語である。

○ クサン

あれも ヤマクサン

あすも クックサン

あれも カヨクサン 或は ヨックサン

「クサン」は固より然るとまたはそれに違ひないといふ意を表すものにて
 普通口語にも文語にも未適當な譯が見出ない。

○ クサイ

あれも ヤマクサイ。

あすも クックサイ。

あれも ヨカクサイ。 或は ヨックサイ

「クサイ」も「クサン」と同じ意である。

○ クサーウ (Kuso) は「クサン」の訛である。「クサン」よりも下品な語

である。この語は東部地方に重に用ひられてゐる。

○ ナーアタ (nāta)

ヤマーア ナーアタ ユキン フットッバンタ。

(山ハ) (チーエ) (ユキガ) (フッテ井マスヨ)

キノフ ナーアタ ダイカ キタババンタ。

..... (チーエ) (タレカ) (キマシタヨ)

ソレモ サウデゴサイマスナーアタ

..... (サウデゴサイマスチーエ)

「ナーアタ」は「ナアアナタ」の約りたものにて、「チーエキミ」といふ場合に用ひらるゝけれども、右の様に單に「チエ」といふ場合にも用ひらる

ヤマナ₁アタ (ヤマデスカ)

ヨムナ₁アタ (ヨムデスカ)

タツ₁ナ₁アタ (タツルノデスカ)

(タテマスカ)

オキ₁ツ₁ナ₁アタ (オキルノデスカ)

(オキマスカ)

ク₁ン₁ナ₁アタ (クルノデスカ)

(キマスカ)

ス₁ン₁ナ₁アタ (スルノデスカ)

(シマスカ)

ヨマス₁ツ₁ナ₁アタ (ヨマスルノデスカ)

(ヨマセマスカ)

オキ₁タ₁ナ₁アタ (オキタノデスカ)

(オキマシタカ)

ヨマン₁ナ₁アタ (ヨマンノデスカ)

(ヨミマセンカ)

右のひどく「ナ₁アタ」は名詞とか動詞、形容詞または助辭等の終止法に添

うて敬意を表する所の疑問にも用ひらるゝのである。

「ナリアタ」は「バン」「カン」「タン」あぞに添ふ時には「ナ」が省けて「バンタリア」「カンタリア」と單に「タリア」となる。

ヨムカンタリア

ヨムバンタリア

ヨムタンタリア

ヨムクサンタリア

右の「タリア」は單に敬意を表す爲に用ひらるゝものである。故に方言にて敬語を使ひて話談しようと思はゞ、其の語尾に「カンタリア」「バンタリア」さへ添ふるなら十分である。

ヨムカンターア (ヨミマスカ)

ヨムバンターア (ヨミマスヨ) (ヨミマス)

ヨカカンターア (ヨウゴザイマスカ)

ヨカバンターア (ヨウゴザイマス)

山カンターア (山デスカ) (山テゴザイマス)

山バンターア (山デス) (山デゴザイマス)

ヨマスツカンターア (ヨマセマスカ)

ヨマスツバンターア (ヨマセマス)

ヨマルツカンターア (ヨマレマスカ)

ヨマルツバンターア (ヨマレマス)

ヨマンカンターア

(ヨミマセヌカ)

ヨマンバンターア

(ヨミマセン)

ヨマーウカンターア

(ヨミマセーウカ)

ヨマーウバンターア

(ヨミマセーウヨ)

ヨンダカンターア

(ヨミマシタカ)

ヨンダバンターア

(ヨミマシタ)

ヨミゴサツカンターア

(ヨミナサイマスカ)

ヨミゴサツバンターア

(ヨミナサイマスヨ)

ヨミンサツカンターア

ヨミンサツバンターア

かく敬意を表すのに、助動辭を用ひないで、「ナリアタ」をそへ、又、パンカンの下「ナリアタ」を添へて、「バンターア」「カンターア」といふのは、現今、東部地方一般に用ひられてゐるが、維新頃までは、町人などが重用ひてゐたものにて、士以上にはあまり用ひられなかつたのとである。

「ナリアタ」はまた約りて、「ナタ」となり従て「バンタ」「カンタ」ともいふ。

○ ノウマイ は「ノウ オマへ」の訛にして「ナリアタ」と同じ意に用ひらるゝが「ナリアタ」よりも下等な語である。

併、これも同等までは否時には同等以上にも用ひらるゝ。「ノウマイ」はまた約りて「ノマイ」ともいふ。

敬語

話す時敬意を表すには助動辭を用ふるとが多いが、又特別に敬意を含んだ詞がある。いまその大略を左にあげてみよう

一、クウ (食フ)

自身の動作につきて、

私

クーウ

ク井ーマッスンゴザア (西部)

クーウバンターア (東部)

クダサイマッスンゴザア

ク井イマセツンゴザア (西部)

クワンバンターア (東部)

クダサイマッセンゴザア

(ダアル)

(イタダク)

(タベマス)

(イタダキマス)

(ダベマセン)

(イタダキマセン)

打消

未來

ク井イマッスンゴザラーウ (西部)
 クワウダンタ (東部)
 クダサイマッシーウ

(タペマセーウ)
 (イタダキマセーウ)

過去

ク井イマスンゴザッタ (西部)
 クタバندا (東部)
 クデサイマシタ

(タペマシタ)
 (イタダキマシタ)

他人の動作につきて、

君

クウ
 クンサーア
 ク井イゴザッ (東部)
 ク井イゴサーア (西部)
 オアガンサーア

(メシアガル)
 (メシアガリマス)

打消

ク井ンサレン
 ク井ーイゴザラン
 オアガンサレン

(メシアガリマセン)

未來

ク井ンサリーウ
 ク井ーイゴザラーウ
 オアガンサリーウ

(メシアガリマセーウ)

過去

ク井ンサツタ
 ク井ーイゴザツタ
 オアガンサイタ

(メシアガリマシタ)

命令

ク井ンサイ
 ク井ーイゴザイ
 オアガンサイ

(メシアガリマセ)

二、ノム (飲ム)

自身の動作につきて、

私

- ノム
- ノミマツスンゴザア (西部)
- ノムバンターア (東部)
- クダサイマツスンゴザア

- (イタタク)
- (イタダキマス)

打消、未來、過去等のつかひ方、前に同じいから以下畧く。

他人の動作につきて

君

- ノム
- ノミンサツ、ゴザア
- ノミゴサツ、ゴザア
- オアガンサツ、サーア

- (メシアガル)
- (メシアガリマス)

打消、未來、過去、命令のつかひかた前に同じいから省く。

三、イーウ (云フ)

自身の動作につきて、

私

イーウ

イウバンダ (東部)

イヒマッスンゴザア (西部)

マウシマッスンゴザア、ゴサッ

(マウス)

(マウシマス)

他人の動作につきて

君

イーウ

インサツ、サーア

イイゴザツ、ゴザア

オインサツ、サーア

(オッシヤル)

(オッシヤイマス)

四、シル (知ル)

自身の動作につきて

私

シル
シッパンターア (東部)

シイマッスンゴザッ、ザア

(ヅンズル)
(ヅンジマス)

他人の動作につきて

君

シル
オシンサッ、サーア

(ゴズンジナサイマス)

五、ミル (見ル)

自身の動作につきて

私

ミル
ミツバタンニア (東部)
ミマッスンゴザリア、ゴサツ

(ミーマス)

他人の動作につきて

君

ミル
ミンサツ、サーア
ミゴサツ、ザリア

(ゴランナサル)
(ゴランアソバス)

六、キク (聞ク)

自身の動作につきて

私

キク
キキマッスンゴサア (西部)
キクバンタニア (東部)

(キキマス)
(ウケタマハリマス)

他人動作につきて

君

- キク
- キキンサツ、サーア
- キツゴサツ、サーア
- オキキンサツ、サーア

七、キル (着ル)

他人の動作につきて

君

- キル
- キゴザツ、サーア
- オキンザツ、サーア

八、クル (來ル)

自身の動作につきて

(ゴラ ンナサル)

(オキキナサル)

(オキキナサイマス)

(オキキアソバマス)

(メス)

(メシマス)

(オメンアソバマス)

私

クル
 キマッスンゴザア (西部)
 クアバンターア (東部)

(マ井ル)
 (マ井リマス)

他人の動作につきて

君

クル
 キゴサツ、ザア
 オイデンサツ、サア

(イラツシヤル)
 (イラツシヤイマス)
 (オイデナサイマス)

九、ユク (行ク)

自身の動作につきて、

私

ユク
 イクバンタ (東部)
 イキマッスンゴザア (西部)

(マ井ル)
 (マ井リマス)

他人の動作につきて

君

ユク

イキゴザッ、ザリア

イキンザッ、ザリア

オイデンザッ、ザリア

(イラツシヤイマス)

(オイデナサイマス)

(オイデアソバス)

十、オル (居ル)

自身のにつきて

私

オル

オツバンターア (東部)

オイマッスンゴザア (西部)

(#マス)

(ナリマス)

他人のにつきて

君

- オル
- オイゴザツ、サーア
- オンザツ、サーア
- オオンザツ、サーア
- オイデザツ、サーア

- (イラツシヤル)
- (オイデナサル)
- (イラツシャイマス)
- (オイデナサイマス)

十一、タマウ、(賜フ)

他人の動作につきて

君

- タマウ
- クンザツ、サーア
- クヒゴザツ、サーア
- オクンサツ、サーア

- (クダサル)
- (クダサイマス)

十二、ウクル(受クル)

自身ののほつきて

私ひ

- ウクル
- ウクツバンターア (東部)
- ウケマツスンゴザア (西部)

- (イタダク)
- (イタダキマス)

十三、スル (爲ル)

自身の動作につきて

私ひ

- スル
- スツバンターア (東部)
- シマツスンゴザア (西部)

- (シマス)
- (イタシマス)

他人の動作につきて

君きみ

- スル
- シンサツ、サーア
- シゴザア、サツ

- (ナサル)
- (ナサイマス)
- (アソバス)

十四、アル (在ル)

アル

アツバンターア (東部)

ガツス (西部)

ゴザツス (西部)

ゴザイマツス

(アリマス)

(ゴザイマス)

十五、ナシ (無シ)

ナカ

ナカバンターア (東部)

ガツセン (西部)

ゴサツセン (西部)

ゴザイマツセン

(ナイ)

(アリマセン)

(ゴザイマセン)

筆

十六、ウマイ (甘シ)

肴

ウマカ

ウマカバンターア (東部)

ウマーウガッス (西部)

ウマウゴザイマッス

ケッユーウニゴザイマッス

(オイシイ)

(オイシウゴザイマス)

十七、ヨイシイ (宜し)

ヨカ

其で

ヨガッス (西部)

ヨカバンターア (東部)

(ヨロシイ)

(ヨロシウゴザイマス)

十八、デアル (ナリ)

パン

バンターア (東部)

(ダ)

(デス)

山

デガッス (西部)

デゴッザス (西部)

デゴサイマッス

一 (デゴサイマス)

佐賀縣方言語典一斑 終

此書は曩に教育會から頼れて方言辭書を編輯し、愈脱稿する場
合となつて、語典も是非之に伴はねばならぬ工合となつたから、
大急ぎに急いで、そこ／＼に取りまとめ、辭書の原稿と共に會に
渡すとした。

辭書は其後間もなく出版するとなつたが、この語典は種々な
都合にて其の運に參らない。かくして月日を経る中會長江尻君
上京の序に上田博士の御目にかけられた様子である。博士は其
の壯撰に驚かれたであらう。又之を不憫に思はれたであらう。併
甚親切に調査に關する精密なる方法を教示せられた。そこで其
の教示に従ひ出来る丈訂正してみたいと思つたが、それにはよ
ほど精密な調査を要するともあると、従て勿卒の間には出来な
い。辭書は既に出版せられて居る今日この上尙時日を延すとは
到底出来ない願望とあきらめねばならない。今は已むを得ず、只

一寸書き加へた位で出版するととなつた。博士に對しては實に申譯ない次第である。

序に申すが、元來これ等を編輯する様になつたのは、方言改良に於て、教育上目下の急を救ふ方針から出たとにて、一時の間に合せに、大急ぎでかき集めたものだから、學問上から見たら、編者のひいき目からでも、半文の値にかないといつて宜しい。それにも關らず、曩にも辭書につき、上田博士の丁寧な御教示、又言語學雜誌の精細な批評など、實に思ひがけない光榮を辱し、却て御恥かしい次等である。しかしこれもあとの祭臍をかんでも、せんないから、この度こそは博士の御教示に従ひ、自分の學問の爲にも全力を奮つてと思つたが、前に述べた次第、今日の事情、出來ぬせんぎ、かへすゝも、博士に對し、亦世の人に對しても申譯がない。併、只これからも、心掛けて訂正を怠らず、調査を進め、世の教を空し

くじない積ではある。

明治三十五年中秋

著者 じるす

<p>八八八八八八八八 〇〇〇〇〇〇〇〇 九九七一七五三三 八八八八八八八八 八八八八八八八八 九四八三二二二二 八八八八八八八八</p>	頁ノ行
<p>出さなす (aten) 柳「イ」添ふ (hiduna) 黒 (kyote) (kyote) 變ると (kyote) 問じい かがる 變ると (kyote) 同トイ かがる 變ると (kyote) 墨 (kyote) (hiduna) 「イ」に添ふ 梅 (baten) 出せなす</p>	誤
<p>出せなす (aten) 柳「イ」添ふ (hiduna) 黒 (kyote) (kyote) 變ると (kyote) 同トイ かがる 變ると (kyote) 同トイ かがる 變ると (kyote) 墨 (kyote) (hiduna) 「イ」に添ふ 梅 (baten) 出せなす</p>	正
<p>六二六六六六六六 六四六五七六六六 六五七六七八九 六六七八九〇 六七七八九〇 六八七八九〇 六九七八九〇 七〇七八九〇 七一七八九〇 七二七八九〇 七三七八九〇 七四七八九〇 七五七八九〇 七六七八九〇 七七七八九〇 七八七八九〇 七九七八九〇 八〇七八九〇 八一七八九〇 八二七八九〇 八三七八九〇 八四七八九〇 八五七八九〇 八六七八九〇 八七七八九〇 八八七八九〇 八九七八九〇 九〇七八九〇</p>	頁ノ行
<p>「バン」同意 をどは カヨクサン オキッナアタ イタダク クダサイマッスンゴ ザア (ミーマス) ゴザツ オイマッスンゴザア サア ナカパンダア ヨイシイ 壯撰 勿卒 又 次第</p>	誤
<p>「バン」と同意 などは ヨカクサン オキッナアタ イタダク クダサイマッスンゴ ザア (ミーマス) ゴザツ オイマッスンゴザア サア ナカパンダア ヨロシイ 杜撰 勿卒 又 次第</p>	正

明治三十六年九月卅日印刷
明治三十六年十月四日發行

定價金三十五錢

編纂者 清水平一郎

佐賀縣佐賀市大字赤松町百七十番地

佐賀縣教育會

發行者

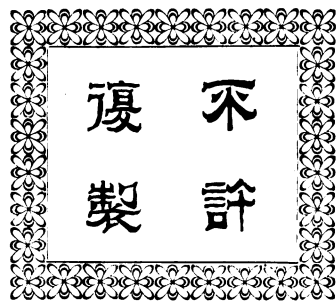
代表者

栗林熊太郎

印刷者

河井金次郎

大阪市北區兔我野町五百四十四番屋敷



發兌元

平井奎文館

佐賀市八丁馬場

95.

2
27
42
1718
2



一寸書き加へた位で出版するととなつた。博士に對しては實に申譯ない次第である。

序に申すが、元來これ等を編輯する様になつたのは、方言改良に於て、教育上目下の急を救ふ方針から出たとして、一時の間に合せに、大急ぎでかき集めたものだから、學問上から見たら、編者のひいき目からでも、半文の値じかないといつて宜しい。それにも關らず、曩にも辭書につき、上田博士の叮嚀な御教示、又言語學雜誌の精細な批評など、實に思ひがけない光榮を辱じ、却て御恥かしい次等である。じかじこれもある祭、臍をかんでも、せんないから、この度こそは博士の御教示に従ひ、自分の學問の爲にも全力を奮つてと思つたが、前に述べた次第、今日の事情、出來ぬせんぎ、かへすゝも、博士に對じ、亦世の人に對しても申譯がない。併、只これからも、心掛けて訂正を怠らず、調査を進め、世の教を空じ

くじない積ではある。

明治三十五年中秋

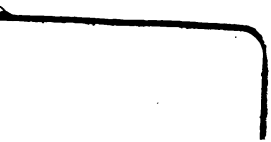
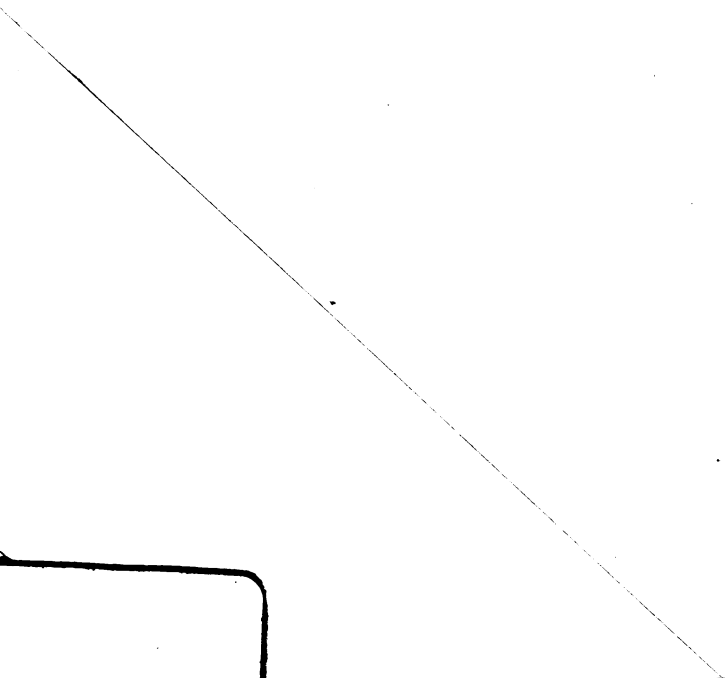
著者 じるす

正誤表

頁ノ行	誤	正	頁ノ行	誤	正
凡例九ノ三	荒	鹿	三八ノ四	左のウ列音が	左にウ列音が
五ノ一〇	クツ	をヲ加フ	四ノ一五	(Mejya)	(Mejya)
七ノ一	發音ノ下	(chā-te)	四ノ七	アイトシ	アイドシ
一〇ノ一	(che)	(ke-te)	四ノ九	孰をも	孰をも
一ノ一	(ke-te)	(he)	五ノ二	(pinjama)	(qiyawa)
一ノ一	(ke)	(i)	五ノ七	禁止	禁止
一ノ一	(i)	(ki)	六ノ二	ツウカ	ツウカ
一ノ一	(ki)	(yu)	六ノ二	禁止	禁止
一ノ一	(yu)	ケイヲ加フ	六ノ二	(sake)	(saken)
一ノ六	ケリノ下	サイヲ加フ	六ノ三	禁止	禁止
一ノ九	サリノ下	ニヲ加フ	六ノ九	(okuru)	(oriru)
一ノ九	イノ下	(kwa)	七ノ二	オチロ	オチロ
一ノ九	ヲ行ノ下	ヲ加フ	七ノ四	イ變へて	イ變へて
二ノ五	ダ行ノ下	ヒをフ	七ノ五	禁止	禁止
二ノ六	ヒ行をフ行ニ	もの	七ノ九	inkai	inkai
二ノ七	とき	(ya)	八ノ六	yomai,	yomai,
二ノ七	(ka)	場所	八ノ七	ukensai,	ukensai,
二ノ八	場合	(hoshii)	八ノ七	kaensai,	kaensai,
二ノ八	(hoshii)	場合	八ノ八	okinsai,	okinsai,
三ノ六	場	に	八ノ八	minsai,	minsai,

95.

2
3
27
48
44
4



B 922,207



Y